**№29　テーマ『悪化した人間関係を修復する実力』**

**講話日2005年8月22日**

**芳村：皆さん、こんにちは。**

**一同：こんにちは。**

**芳村：今日は本当になんか蒸し暑いですね。昨日ちょっと大雨が降ったので、少しは気温が下がったようですけど、湿度が今日は非常に高くってね、外でお仕事をなさる方は大変だと思います。今日、お話をするのは、悪化した人間関係を修復する実力というので、前回は、よい人間関係をつくる実力ということでお話をしたんですけども、前回の話が、この愛の実力というものを形成していくための土台となる、そういう力なんですよね。で、今日、お話しするのは、そのよい人間関係をつくる実力としての愛よりも、もう１レベル高いですね、もう１次元高い、より高度な愛の実力というものをどうつくるかという、そういう段階の話になります。悪くなってしまった人間関係を修復するということは、これはどういうことかというと、とにかく今、離婚の激増とかですね、幼児の虐待とか、いろんな人間関係で、違いを理由に人間同士の対立が生じるというですね、そういうこのことが多々あるわけですけども、これはすべて理性によってですね、真理は一つと考える、そういうこの考え方を土台として出てきておる問題というふうに言うことができるわけですね。**

**ですから、理性によってつくり出されてくる人間関係の破綻、さまざまな問題というものを乗り越えていこうと思ったらですね、愛の力というものを理性に勝るこの問題解決能力を持った力に成長させていかないと、悪化した人間関係を修復するっちゅうことはできませんので、この最初からよい人間関係をつくろうというね、そういうこの意図を持った、そういう愛の力よりもですね、悪くなってしまった状態のものをどういい状態に戻すかっちゅうことは、やはりより高度なその愛の力が要求されてくる。その意味において、この悪化した人間関係を修復する実力というものをつくっていこうと思ったならば、愛を理性に勝る問題解決能力を持った、そういうこの力にしていかなければならないっちゅうことになるわけですね。そういうことを考えても、前回のよい人間関係をつくる実力よりも、今日、お話をする、この愛の力のほうがより高度な愛の力だというふうに言うことができます。**

**で、基本的にこれまではですね、多くの方々は、愛というものは、この情緒、感情、情熱というふうな、そういうものであって、理性と同じように問題を解決することができるような、そういうこの能力ではないというふうに考えてる人がほとんどだったと思うんですよね。現在でもそういうふうな考え方の人が多いと思います。愛というのは、感情、情緒、情熱という次元のものであって、問題を解決することができるような能力として、愛というものは考えられてないという、そういうこの方が多いと思います。だけども、この悪化した人間関係を修復する実力というですね、そういう段階になれば、どうしてもですね、われわれは、理屈によってつくり出されてくる問題を乗り越えようとするんですから、必然的にその理性よりも、より高度な力というものを求めていかなければならない。理性が人間の持ってる能力の中で最高の能力だというふうに考えておったのではですね、理性によってつくり出されてくる問題を解決していくという、そういうふうな力を人類は持つことができません。その意味で、この理性に勝る力、理性を超える力、理性よりもより素晴らしい力とはなんなのかということをですね、ちゃんとこう知る必要があります。**

**で、この愛というのは、理屈を超える力というふうに言われてるんですけども、なぜ愛は理屈を超える力なのか。なぜ愛は理性よりもより高度な力というふうにですね、より高度な能力というふうに言わなければならないのか。それは、原理的にどういうことなのかといったら、この理性という能力は、人間の命の中の、また肉体の中の脳という肉体に限定された能力である。理性という能力は、肉体の中の脳という部分に限定された能力である。だけども、愛というのは、命が本質的に持っておる能力であって、命は愛によって満たされる。これはもう実際問題、自分が生まれてきたのは、お父さん、お母さんの愛の営みがあったから出てきたんだというね、そういうこともありますけども、とにかく原理的に言って、この命を生み出すというですね、そういう働きの中には、愛という力がこもっておる。愛は命を生む力であり、また命を育む力であり、また命を満たす力である。命は愛によって生み出され、愛によって育まれ、愛によって満たされるのである。そのことを考えるならばですね、その命の中の、肉体の中の脳という肉体に限定された能力である理性よりもね、愛の力のほうが、より大きな、より根源的なこの力を持っておるというふうに言うことができます。**

**その意味で、昔から愛は理屈を超える力というふうに、こう言われてきたんですよね。だけども、残念ながら、まだ人類は、愛というものを能力として成長させていこうという試みを、まだ人類はやったことがありません。愛というものを問題解決能力を持った実力として成長させていこうという、そういうこの意図を持ってですね、愛というものに、この対応するというか、愛に立ち向かう、愛というものを成長させようという、そういうふうな努力をしたことがありません。人類はこれまでずっとですね、愛というものを情緒、感情、情熱という、そういうふうな自然発生的なですね、ものとしてしか考えておりませんでした。だから、古代のですね、ずっと昔の古代の人々が、愛についていろいろ悩んでおったと同じ問題で現代人も愛について悩んでおりまして、愛の歴史にはですね、成長、発展、進化の跡がない。そういうこの状況であります。ということは、どういうことなのかといったら、愛というものは、まだまだ自然発生的なですね、そういう状態のままに放置されておって、愛はまだ人間における文化とはなっていない。**

**文化というのは、何かをすることができる力と、こう言うことができるわけですけども、そういうこの愛というものは、まだ人間にとって文化とはなっていない。すなわち、愛というものは、まだ人間がこの意志を持ってね、愛を成長させるというようなことをまだやったことがないわけですね。だけど、われわれはこれから離婚の激増を食い止めるためにも、また幼児の虐待を防ぐためにも、また戦争から平和への道をつくっていくためにも、学校におけるこのいじめという問題をですね、乗り越えていくためにも、われわれは愛というものを年齢が成長するにしたがって、愛の力も成長していくというですね、そういうふうな形で、この愛という能力に取り組んでいかなければならない。年齢が成長するにしたがって、だんだん、だんだん、愛の力が増していって、そして、愛の力によって、理性によってつくり出されてくる問題を乗り越えていけるというですね、そういう力をつくっていかないと、人間は離婚の激増をこの食い止めることができません。また自分自身が離婚の危機に陥った場合に、それを乗り越えていくということができないわけであります。**

**また幼児の虐待というものもですね、愛の力を成長させていかないと、この理性だけでは幼児の虐待というのはますます加速していきます。幼児の虐待というのも、自分の言うことを自分の子どもが聞かないからね、むかつくといってですね、憎たらしいという、そういうこの思いで幼児虐待が生じるわけですから、そういうこの理性によってつくり出されてくる、この悲しい人間関係の破綻というものはですね、理性によってはいかんともし難いものですから、愛の力を成長させていく以外にですね、それを乗り越えていく、その問題を解決していくという、そういう力を人類は持つことができません。そういう意味においてですね、この現在、そういう問題がなくっても、皆さん方もやがてどこかでそういう離婚の危機に直面することがあるかもしれないし、また子どものいろんな、この子どもとの関係の中でですね、親として悲しいかな、子どものいろんな言動にむかつくというふうなね、そういうこの気持ちになってしまうこともあるかもしれないし、いろんな考え方の違い、感じ方の違い、立場の違い、人間性の違いという、そういうものを原理にしてですね、社内でもいろんなこの人間関係の問題がこう生じてくるかもしれません。**

**でも、悪くなってしまったら、人間関係がいったん悪くなってしまったら、もうこれはしょうがないって、すぐ諦めてしまうようではね、自分自身の幸せな人生というものをつくっていくことができません。やっぱり自分の周りに自分の気に入らん人が増えてくれば、自分は不幸ですしね。だから、できるだけ自分の周りに自分が好きだと思える人がどんどん増えてくるという、そういう力をつくっていかないと、自分は幸せな社会生活、幸せな人生を送ることはできません。そういうふうなことからもですね、われわれは愛の力を、やっぱり成長させていく努力をしていかなければならない。そのためには、愛というものをですね、この文化として成長させていく。文化というのは、何かしら問題を解決することができるような、そういう能力として愛というものを成長させていく。そのことが大事なんですよね。**

**人間関係が悪化したならば、破綻したならばですね、もうしょうがないって、すぐ諦めてしまうようでは、人間への愛があるとは言えない。人間への愛があったならば、人間同士、お互いにいがみ合ってるなんて悲しいじゃないか。なんとかしようというのが、人間への愛というふうにね、言うことができるものですから、その意味においても、この悪化した人間関係を修復する実力というのは、愛という能力を、理性に勝る問題解決能力を持った力にしていく。そういうこの試みだというふうにですね、言うことができるわけで、そういうこの理性よりも、より高い能力としての愛をわれわれは持たなければ、これからの個性の時代、お互いに違っててもいいんだと。お互いに違う考え方でもいいんだ。そういうこのことを前提として、どう一緒に仲よく生きていくかというね、そういうこの問題にわれわれは答えを出して、個性の時代を幸せに生きてくという、そういう力を獲得することはできません。**

**そこでこの悪化した人間関係を修復する実力としての愛をどうつくるか。その方法論ということを考えますと、その方法にも５つの方法があります。レジュメに書いてありますように、第１番目は、どんな人でも好きになる実力。第２番目は、誰からでも好かれる実力。３番目は、対立を乗り越える実力。４番目は、問題解決能力をつくる。最後の５番目は、真実の勇気ですね。この５項目が、悪化した人間関係を修復する実力と言うことができるものに愛を成長させていくための方法論というふうにですね、言うことができるものです。そこで、まずこの悪化した人間関係を修復しようと思ったら、まず第１番目にどういうことを考えなければならないか。で、悪くなってしまった人間関係をよい人間関係にしようというんですから、嫌いな人でも好きになれるというね、そういう力をつくることが、まずは要求されてくるわけですよね。嫌いな人がいつまでも嫌いなようじゃ、悪化した人間関係は修復できませんから、嫌いな人でも好きになれるという、そういうふうなこの方法というか、そういう力を、つくっていかなければならない。で、そういうところからですね、まず第１番目は、どんな人でも好きになる実力というものをどうつくるかという、課題になるわけです。**

**だけど、人間そのものは不完全ですから、どんな人でも好きになるっちゅうことは、絶対これは無理な話です。実際問題、もうこの人とは、なんかもう生理的に完全に合わへんなというような、そういう人もおりますからね。もう絶対この人とはうまくやっていけへんというような、そういう方もおりますので、そこまで別に無理をする必要はない。その悪化した人間関係を修復するというのはどういうことなのかといったら、この人とだけは絶対に仲たがいの状態では置いとけない。この人とだけはなんとか悪くなった関係を修復したい。そういうこの意欲を、そういう意志を持ったときに、そういう意志を強く持ったときに、どうしたら人間関係を修復するっちゅうことができるのかということをね、考える。そのときにこの力を使うということなので、どんな人とでも仲よくせんないかんっちゅうことは、ちょっとこれは無理な話なんですよね。だけども、やっぱり、より多く、一人でもより多くの人が好きになれるというね、そういう力をつくっていく努力だけはしないと人生は貧しくなります。心豊かな、楽しい、幸せな人生を送ることはできません。その意味で、とにかくできるだけ多くの人を好きになることができる。そういう意味で、どんな人でも好きになる実力というのをどうつくるかということをね、考えなければならない。**

**で、しかも、悪くなってしまった人間関係をよい人間関係に修復していくという仕方で、自分の好きな人を増やしていくというですね、そういうことを考えなければなりません。よい人間関係をつくるという形で、よい人間関係ができてくるという段階ではなくってですね、その悪くなってしまった人間関係を修復するという仕方で、自分の好きな人を増やしていくというですね、そういうこのことですから、これはちょっと難しい話です。だけども、それはできるので、どういう方法を採ったらそれができるのかということを考えていかなければならない。まず第１番目はですね、どういうことなのかというと、ちょっと難しい言葉ですけども、両義性というね、言葉。両義性というのは、両方の両ね、１両、２両、３両のね、両方のね、両方ともっちゅうときの両ね。で、義というのは義理の義ね。両義性という字を書く、両義性ね。両義性というのは、両義性っちゅうのはどういうことなのかといったら、どんなことでも、どんなものでもね、マイナスにもプラスにも評価できる。どんなことでも、マイナスの評価もできるし、プラスの評価もできるというね、そういう原理が両義性というふうに言われるんですけども、それを用いるわけですよ。**

**ちゅうことは、どういうことなのかというと、どんな人でも好きになろうと思ったらならばですね、今、自分がある人に対して嫌な人やなとこう思っておってもですね、それをこのプラスに解釈したらどうなるかということを考えることによって、最初は嫌な人やなと思っておったのに、ああ、そういういいところもあるんかと思ってですね、そして、その人に好意を持って接することができるというふうになってくるというね、そういうふうなこの方法なんですよね。で、このどんな人でも好きになる実力というのをつくる方法は２つあって、その第１番目がね、第１番目が両義性という原理を使うっちゅうことなんです。具体的にはどういうことなのかと申しますと、ある人に対して、あいつは臆病なやつやとこうね、思っとったとしますよね。で、そういうこの人に対して否定的な、あいつは臆病な駄目なやつやっていう、そういう目で相手を見とったら、もうこれ、絶対、人間関係はよくなりませんし、人間関係を修復することはできません。だけども、臆病っちゅうことは、マイナスにね、ある現象を評価してるから出てくることなので、それをプラスに評価したらどうなるかっちゅうことを考えると、そこから人間関係が修復できる糸口が生まれてくるんですね。**

**で、臆病っちゅうことは、プラスに評価したらどういうことなのかというと、臆病な人というのは、プラスに言ったら、慎重な方なんですよね。慎重な方。臆病ということは、プラスに言うたら、慎重な方なんだ。で、気が小さいっちゅうことは、堅実な方なんだ。お節介というのは、プラスに言うたら、思いやりがある人なんですね。干渉的な人というのは、プラスからしたら、親切な方なんですよね。愛情の押し付けというのは、それをプラスに解釈すると、優しい方になるわけですね。これは心理学ではね、心理学ではね、女房操縦法とかね、亭主操縦法とか、人心操縦法というように言われるもので、その人を自分の思うように動かそうと思ったらどうするかというね、そういうふうなこの心理学的な技術と関係してることなんですよ。だから、結婚して、奥さんが主人に対してこういう主人になってもらいたいと思ったら、そういう褒め方をしたらええんやと。また、ご主人がこういう女房になってもらいたいと思ったら、そういう褒め方をしたらそうなってくるということでね。よくブタも褒めれば木に登ると申しますけどね、そういう褒められると、心いいもんですから、褒められると、そういうふうに褒められたようになってしまうという傾向性がこう出てくるんですよね。**

**だから、本当は臆病なんだけどね、臆病な人に、なかなか慎重な方ですねと言ってあげるとですね、本当は臆病なんだけど、だんだん慎重になってきちゃったりなんかしてね。で、そういうふうなこう変化が出てくるわけですよ。で、最初は単なるお節介なんだけども、なかなか思いやりのある方ですよと、こう言ってあげると、お節介なんだけど、だんだんそれが思いやりに変わってきたりなんかするわけですね。そういうふうに言ってあげることを言って、そういうふうに導いていくというね、これは子どもの教育にも使えるわけですよ。褒めてあげて、そういうふうにしてしまうというね、そういうこの方法論です。**

**で、この効果はね、どこにあるのかというと、臆病なやつやという、そういうこの意識になってると、その人をこう見下すようなね、その人に対して何かしらこう、見下げるようなね、そういうふうなこの目で見てしまうんですけども、それを慎重な方ですよねとこう言っておることによって、だんだん、だんだん、その人を見る目がですね、慎重なこの生き方をする人なんだというね、そういうこのプラスの目で相手を見ることになってくる。で、この相手をどういう目で見るかによってですね、人間関係は全然違ってくる。相手を否定的な目で見るか、相手を肯定的な目で見るか、そのことによってですね、相手はこちらのほうに対する態度を変えてくれるんですよね。否定的な目で相手を見ておったら、ますます人間関係は悪化しますけども、相手を肯定的な、評価する目で相手を見つめればね、相手は自分を評価してくれてると思うから、だんだん、だんだん、こちらに対していい気分で接してくれるというふうに変わってくる。**

**で、人間関係で一番大事なのは、相手と接しておるときの目、目つきなんですよね。よく昔から、目は口ほどにものを言うと申しますけど、人間関係を原理的に決めてしまうのは、相手と接しておるときにどういう目でその人を見てるかというですね、その目の色合いで人間関係はほとんど決まってしまいます。口先でどんないいことを言っておってもね、目が相手を見下げておったら、もう完全にその目が優先するんですよ。口先でどんなに褒めておってもね、目がその人を見下げてるようなね、そういう目で見ておったら、もうその人間関係はよくはなりません。そういう意味で、目を変えるためにはね、自分の意識を変えなければならない。目は心の窓と申しますから、自分の意識を変えないと、自分の目は変わりません。で、自分の目を変えるためには、自分の意識を変える。意識を変えるためには、この両義性という方法を用いなければならない。今までは、その人を臆病な人だと、こう言うとったのをですね、その臆病っちゅうことは、それをプラスに見たらですね、慎重というふうに言えるんだと。そういうふうなことをわかって、知ってですね、そして、その臆病な人に対して、臆病っちゅうことは、それをプラスに評価したら、慎重っちゅうことになるんやと。実は慎重な方なんだというね、そういうふうなこの目で見るという、そういうこの訓練を自分でしていくんですね。**

**これは、まだまだいろいろな方法があってですね、わがままで、自己中心的だというね、そういう人がおったならば、それをプラスに評価したらどうなるかといったら、なかなか個性的でユニークな方ですよねとね、言ってあげる。そういうふうに言ってあげると、相手は喜ぶわけですよ。みんなから、わがままで、自己中心的で、嫌なやつやとこう皆、思われとるのにですね、ある人間から、なかなか個性的でユニークですよねとこう言われると、ニコッとしちゃったりなんかしてね、ああ、そうなのかと思ってしまっちゃったりなんかして、で、そういうふうに褒めてくれた人に対してだけは好意を持ってね、この接してくれるというふうに変わってきます。で、実際問題、個性的でユニークですねと言ってると、本当はわがままで、自己中心的なんだけど、だんだん、だんだんですね、個性的でユニークというふうな、そういうこの状態にその人は変わってきてくれる。そういう変化をね、つくり出すことができる。**

**これが、両義性というね、心理学的には、亭主操縦法、女房操縦法、人心操縦術というね、言われる、そういうこの技術なんですけど、そういう効果があるわけなんですよね。それから、支配的で傲慢だというね、そういう人に対しては、なかなかリーダーシップがあって、統率力がありますよねって言ってあげると、本当は支配的で傲慢な性格なんだけど、それがだんだん、そういうふうに褒められてることによって、リーダーシップになってしまったり、統率力に変わっていったりという、そういうこの成長、変化を遂げることができるんですね。で、なんか理屈っぽくて、冷たいやつやというね、そういうふうなこう人間がおったならば、その人に対してはどう言うかといったら、なかなかクールでかっこいいじゃないですかと、こう言ってあげるわけですね。すると、みんなから、冷たい、理屈っぽい嫌なやつやと言われとんのに、それをクールでかっこいいと言われると、なんかうれしくなっちゃったりなんかしてね、で、そういうふうにだんだん変わってきてくれるという傾向性が出てきます。で、完璧主義というね、そういう人に対しては、なかなか繊細な感性の持ち主ですよね。完璧主義っちゅうのは、反対から言うたら、繊細な感性を持ってないと、完璧主義にならないんですね。だから、完璧主義の人に対しては、繊細な感性の持ち主ですねと言ってあげる。で、神経質な人に対しては、神経質な人に対しては、なかなか心配りがありますよねと言ってあげる。そういうふうにしていくとですね、相手は変わってきてくれるんですよね。で、自分が褒めたように、相手は変わってくる。**

**だけど、あんまり違うことで褒めたらいかん。めちゃめちゃ暗い人にね、明るくなってもらおうと思って、めっちゃ明るいですよね。そんなばかなことを言うても、急には変わりませんからね。だから、同じ現象で、マイナスにも評価できるし、プラスにも評価できるという、そういう範囲内で褒めるというのがね、この両義性という、このやり方なんですよ。だから、神経質という、そういうこの人間性というのは、そのままでプラスに評価したら、心配りがあるという、そういうこの状態になることができるわけなので、そういう意味でですね、マイナスのものでもプラスに転換できるという、そういうことになってくる。だけど、めっちゃ暗い人が、めっちゃ明るくなることはないのでですね、そういう褒め方をしたら、これはかえって、あんまりにもかけ離れ過ぎて、うそっぽいというか、何を言うとんねやっちゅうことになってきますから、かえってそういうのは、いわゆるほめ殺しみたいなもんで、かえって気分が悪くなるっちゅうか、逆効果になってきますので、同じ現象の裏表というね、そういうこの感じで、マイナスに評価されてるものをプラスに評価する力を持つ。これはものすごくね、実践的には大きな効果がある、この人間関係の修正法なんですよ。**

**で、暗い人がおったならばですね、その人に対してどう言うかといったら、暗い人に対しては、なかなか深みがありますねといって褒めてあげるんですね。すると、本当は暗いんやけどね、深みがあると言ってもらえることで、だんだん本当に深みが出てきちゃったりなんかしちゃったりなんかすることがあるんですよね。で、また深刻なね、深刻な、深刻ぶった顔っちゅうか、昔はよく苦み走ったいい男なんていうようなことを言ってましたけど、なんかそういう深刻ぶった顔の人に対してはですね、なかなか思慮深い方ですねと。深刻っちゅうのは、なんかちょっと暗い感じがしますのでね、深刻ぶったそういう人に対しては、なかなか思慮深い方ですよねと、こう言ってあげると、本当は単なる深刻なそういうこの性質なだけなんだけど、だんだんそれがですね、思慮深さに変わってきたりなんかするようなこともある。で、またあんまり軽くて調子がよ過ぎるなんて、そういうふうな人もおるわけですけど、そういう人に対しては、なかなか楽しくって協調性がありますよねって言ってあげると、そういう単に軽いね、そういう感じの人でもですね、だんだんそれが明るくって、協調性があるというね、そういうふうな感じの人間性になってきてくれると。**

**それから、自分がないというような人に対しては、なかなか素直な方ですよねとこういう褒め言葉を遣う。また世間知らずやというふうに言ってしまわないで、世間知らずということは、あんまり世間にもまれて汚れてないのでですね、そういう意味でなかなか純粋な方ですよね。そういうこの言い方をしてあげる。また頑固な、頑固一徹っちゅうかね、そういう頑固な人がおったならば、その人に対しては頑固やっちゅうて、こう非難するんじゃなくって、なかなか腹が据わってますよねとこういうような、そういう褒め言葉を遣う。すると、本当は頑固なんだけど、なんか腹が据わってるみたいな、そういう感じの、人間性に近づいてくるということになってくる。それから、また、融通が利かんというね、そういうこのことがあったならば、融通が利かんっちゅうことは、それをプラスに言えば、なかなか信念がある方ですねって言ってあげる。それはその人をプラスに評価する言葉ですのでね、だから、その人間、プラスに評価されると、やっぱりうれしいですからね、だから、そういうふうな自分がうれしいと思う方向に自分自身が変化してくるというね、そういうこのことになってきます。また大ざっぱな人に対してはですね、おおらかな方ですねとかね、いいかげんな人に対しては寛大な方ですねとかね。それから、無神経な人に対してはですね、なかなか太っ腹ですよねとかね。**

**そういうふうなこの言い方をすると、そのことによって自分が評価されたという、そういう思いがあるもんですから、そういう褒められたような、褒めてもらったようなふうに変わってくるというね、そういう傾向性を持ってきます。これは皆さん方でも、これまでの人生の中でね、そういう対応をしてもらった経験があるかもしれませんけど、そのことを考えれば、これはすぐわかることです。で、そういうふうなことをですね、この悪化した人間関係の状況で使うとですね、人間関係はがらっとこう好転してくるというね、そういう効果があるわけであります。大事なところは、相手を嫌なやつやなという目で見るんじゃなくって、ええやつやんかって、そういう目で見るというね、その自分の相手を見る目を変えるというね、そのことが人間関係を変えてしまうという、そういう原理と関係してるわけですよ。で、そういう自分の相手を見る目を変えるだけじゃなくってね、相手自身が褒められることによって喜んで、そして褒めてくれたようになろうとするというね、そういう心理学的な影響力っちゅうか、効果があるわけです。これを知ってるだけでもね、随分とね、夫婦関係も変わってきますし、親子関係も変わってきますし、社内のね、人間関係でもがらっと違ってきます。これ、やってみんとわからん話で、聞いてるだけでは、単なる話だけで終わってしまいますが、やってみたらね、本当に劇的な効果が出てくるんですよ、これは。**

**実際問題、いろんなね、人間関係を皆さん方もこれまで経験してきてると思いますけど、相手が自分を見る目がね、何かしら否定的な、嫌な目だったら、もうその人を完全に嫌いになってしまいますよね。だけど、相手が自分のことをなんか好きやとかね、なんか惚れたとかね、好意を持って自分の顔を見てくれると、なんとなくその人をまた好きになっちゃったりなんかしますからね。そういう目の力っちゅうのは、ものすごく大きいですよ。人間というのは、身一つでどうにでもなるんですよ。人間、みんなから不信の目で見られれば、生きていけなくなってしまう。人間、目一つで殺すことができる。また、目一つで生かすこともできる。どんなに人間関係がね、悪い状況にあってもですね、その人のことを好きや、好きや、好きや、好きやという、そういう目でずっと見とったらね、相手もいつまでもこちらのことを睨んでられなくなってしまうんですよね。好きや、好きやとこう目で見つめられたら、なんかこう、自分のことを好いてくれてるなと思うからですね、いつまでも相手のことを嫌やとか、なんかこう睨んでね、対立的な意識になってられなくなってきてね、だんだんと関係は緩んでくるんですよ。目はものすごい力ですよ。目は口ほどにものを言うんじゃない。口以上にものを言ってるというね、目ほど大事なものはない。お客さんと接する場合でも、仲間と接する場合でも、上司と接する場合でも、部下と接する場合でも、目ですべてが決まるんだ。**

**家庭生活もそうです。夫婦の関係もそうです。なんか最近、あいつは俺に対してなんかこう、感じが悪いなってね、思うっちゅうことはどういうことなのか。それは、それ以前に、どっかでね、自分が相手を、相手と接しておるときに、相手を見る目の中に、相手が嫌だなと思うような目つきがあったんですよね。で、それは自分自身は、自分自身の顔を鏡で見ながら相手と接するわけにいきませんから、わからないんですよね。だから、なんであいつ、最近、俺に対してなんかこう、嫌な感じなんやろうなとこう思ってしまって、原因がわからんっちゅうことが多いんですけど、原因がわからんっちゅう場合は、ほとんどね、その前に自分が相手となんか話したり、接してる場合に、相手をなんかしら、批判的な目で見てしまったことがあったり、あるいは、相手を見下すようなね、軽蔑するような目で相手を見てしまったっちゅうことがあったり、そういう自分でも気が付かない間に、相手に対してですね、そういう嫌な目で相手と接しておった。それが相手の気に障って、そこから人間関係は急になんかしらんけど、具合悪くなってしまうんですね。**

**ものすごくそういう意味ではね、目というものに対しては、ものすごくやっぱり、われわれは気を遣わないといけない。一瞬のね、その目の変化というものが、お客さんにも、ものすごく大きな影響を与え、それがね、契約ができないっちゅうことになってしまう原因になることが多いですよ。ええとこまでいったのにね、契約できなかった。そういうのはね、何かしらね、そのお客さんに、何かしらこう、嫌な思いをさせたというね、そういうこの目や表情や態度があった場合が多いですよ。とにかくこのどんな人でも好きになる実力というものをつくっていく第１番目の原理は、この両義性といってですね、マイナスに評価しておるものをプラスに評価する力、そういうこの能力を成長させることが、非常にこれは大事です。そのことによって、多くの人との人間関係をよくしていくし、また修復するということができるということをね、知っておいてもらいたい。**

**で、２番目の、このどんな人でも好きになるというですね、方法。悪化した人間関係というものをよくしていくというね、そういうこの第２番目の方法は、声を掛けるということなんですよ。声を掛ける。関係が悪い状態でね、なかなかこちらから相手に対してですね、朝、会ったときに、おはようってなかなか言えないですよね。なんかこう、けんかしてる状態のときにね、こっちからおはようっちゅったら、なんかもう負けましたみたいなことになってしまうし、なんかこう関係の悪い状態で、おはようなんて言うたら、なんか相手にこびへつらってるみたいな感じになって、けったくそ悪いというんでですね、なかなか声を掛けられないですよね。だけど、そこをですね、この人とだけは絶対に人間関係を悪い状態で置いとけない。なんとか修復したいと思ったならば、けったくそ悪くってもですね、とにかく相手がどう思うともね、とにかくは、相手に対してこちらから積極的に声を掛けるという、そういうこの行動を起こす以外にですね、関係を修復していくこの実践はないんですね。**

**これは夫婦でも、前の晩にけんかするでしょう。で、けんかして、お互いにふてくされて寝てしまうでしょう。で、朝起きるとね、どっちから先におはようっちゅうか、勝負になるんですよ。で、俺からおはようと言ったら、なんか負けたことになるしなと思って、なかなかおはようって言えないんですよね。で、女房のほうでも、私からおはようなんちゅったら、これはもう相手にこびてるみたいになってしまうから嫌やと。相手から声を掛けてくれたら、おはようって言ってあげるけど、相手からおはようって言わへんなら、自分が言うのは嫌やって、そういうことになってですね、お互いに張り合って、なかなかこう、おはようが出てこないんですよね。で、そのまいさつもしないで会社に行ってしまうと、一日気分が悪いんですね。そこをこう思い切って、どっちから先におはようっちゅうか。それはどちらのほうにより深い愛があるかが、そこでわかるわけですよ。自分のほうから声を掛けるということをしたほうが、より関係修復を望んでおる、その思いが強いっちゅうことになってですね、その愛がより大きい、深いということになってきます。**

**その意味で、この悪化した人間関係を修復するというね、一般的なそういう場合でもですね、まず自分のほうから相手に対して声を掛けるということをできるかどうかがね、本当にその人となんとか早くいい人間関係に戻りたいという、そういう気持ちが強いっちゅうことをですね、その行為は意味するわけであります。だから、まずはとにかくは、勇気を出してね、思い切って、その関係の悪い、敵対関係にある人に対してですね、どうしてもこのままで放っておけないという場合には、こちらから相手に対して、朝、会ったときに、おはようと声を掛けるということができるかどうかですね、これは非常に大きな勇気がいることですし、また本当に人間としてのですね、この強さというか、本当のこの愛がないとなかなかできません。だけども、自分のほうから相手に声を掛けるというこの勇気がですね、人間関係修復のものすごく大きな、この力になってきます。で、声を掛けるということは、心の橋を渡す行為なんだ。声を掛けるっちゅうことは、心の橋を渡す行為である。どんなにいい人間関係でもね、声を掛けるという、この行為を怠ってると、だんだん人間関係は薄れていきます。で、ずっと声を掛けなければ、最終的には関係は切れてしまいます。**

**だから、声を掛けるということは、人間関係をですね、修復していくためのものすごく大きな力になります。だけども、悪化した人間関係の中で敵対する相手に対してね、おはようなんていうようなことを言うてもね、相手からしたら、何がおはようやと。何をおべんちゃら言うとるんやというような感じで、「ふん」といって、横を向いて行ってしまうことが最初の間は続くんですよね。だけど、それでしょげとったらいかん。とにかくは、人間関係をどうしても修復したいんだという強いこの思いがあったならばね、相手がとにかくは返事しようとしまいと、とにかくは、相手から返事が返ってくるまでね、毎日、毎日、とにかくは、おはよう、おはようって言い続けないかんのですよ。こんなに毎日、毎日、おはよう、おはようって、あいさつしてあげてるのにね、相手から全然、おはようという声が返ってこないと。もうこれは、もう脈がないなと。これはもう人間関係、修復無理やなと思ってね、途中でやめてしまったらね、その程度の思いやった。その程度のやつやった。その程度の愛やったんやということになってしまうんですよ。**

**で、人間というのはね、毎日、毎日、とにかくおはよう、おはようと声を掛けられとったらね、どっかで必ずね、相手からもおはようという声が返ってくるときがくるんですよ。これは絶対そうなるんだ。これは心理学的に言ってね、毎日、おはよう、おはようって言われてるとね、なんか言い返さないとおかしいような気分になってくるんですよ。だけど、向こうの気持ちとしてはね、こんなやつにおはようなんて言い返すかと思ってですね、最初の間は頑張って、なかなか声が返ってこないんですけどね、だけど、人間というのは心理学的に言って、声を掛け続けられると、なんか声を掛け返さんとバランスが取れんみたいなね、そういう心理構造に追い込まれてしまうんですよね。そうすると、あるとき、こちらから、おはようと言ったときにね、相手がうっかり、おはようと言い返しちゃったりなんかして、言っちゃったなんてなことになってしまってね、そっからぱっとこう人間関係が変わってくるということにもなることがあるんですよ。とにかくはね、おはよう、おはようって言い続けとったら、必ずいつかどこかで、相手からも声が返ってくるときがくる。そのことを確信してないといけないんだ。関係修復する場合にはね。とにかく声を掛け続ければ、必ず相手からも声が返ってくるときがくるんだ。だから、相手から声が返ってくるまで、声を掛け続けるというこのね、信念がね、人間関係修復には大事なんですよ。声が返ってくるかもしらんけど、こんかもしらんって、そういうこの半端なですね、不安な、そういう思いでやっておったんじゃ、もう絶対これは関係修復できません。**

**これはもう人間関係修復だけじゃなくて、人生を生きるいろんなこういうことに関係する根本原理なんですよ。いったんやり始めたらね、結果が出るまでやらないと、努力はゼロなんですよ。結果が出るまでやらなかったら、もうそれは、やらなかったのと同じことになってしまうんですよ。いったんやり始めたら、結果が出るまでやり続ける。それが成功できる人間の生き方でね、成功できない人間はね、途中で理性的になってしまってね、こんだけ毎日、おはようっちゅうてるのに、相手からおはようという声が返ってこないと。もうこれは脈ない、無理やと、やめてしまう。そういう人は、この人生において成功できない人間のタイプになるわけですね。成功する人は、成功するまで頑張った人なんだ。成功できない人は、途中でやめた人なんですね。どこに違いがあるかといったら、信念がないということだけの話なんだ。とにかくいったんやり始めたら、結果が出るまでやり通す。そういうこの気持ちがですね、あらゆることを実現していくというかね、そういうこのことができる、非常に大事な方法論です。**

**途中でやめたら、その程度のやつやったで終わってしまうんですよ。これ、よく昔はですね、落語とかね、浪曲、浪花節語りとか、講談師なんかは、自分が尊敬してる先生のところへ弟子入りを申し込むわけですよ。で、弟子にしてくださいっちゅって、こう行くんですけど、だけど、最初はみんな、弟子にはできんっちゅって、断られるんですよね。で、断るっちゅうのは、その人がどの程度の根性のやつかっちゅうことを見るために、まずは断るんですよ。断ってすぐ帰ってしまうようなやつは、もうこんなものは、そう大した思いやなかったっちゅうことになってしまうんですよね。で、普通は弟子入り、弟子にしてくださいっちゅうてやってきて、で、お師匠さんから弟子にできんって言われてもね、どうしても弟子になりたいという、自分のそういうこの思いの深さ、強さということをお師匠さんに示すために、そのお師匠さんの家の門の前に座るんですよね。で、自分の根性を見せるというね、そういうことをするわけです。**

**で、朝見ても座っとる、昼見ても座っとる、晩見ても座っとる、風が吹いても、雨が降っても、雪が降っても座っとる。ずっと座っとると。なんちゅう根性のやつやっちゅうんでね、これはひょっとしたら見込みがあるなと思って、弟子にしようとこう言ってくれるんですよ。だけど、そういうこの強い思いがなくって、理性的な人はね、こんだけ座っておって、お師匠さんが全然、声を掛けてくれへん。これはもうやっとっても無理なんや、やっとっても脈ないなと思ってね、途中で帰ってしまったりする。そしたら、結局それは、お師匠さんの立場から言うたら、その程度の思いやったんか。ああ、その程度のやつやったんか。その程度の根性のやつかで終わってしまうんですよ。結果が出るまでやり通すっちゅうことは、いかに人生においてね、大事なのかっちゅうことをね、そういうところからわれわれは学ばなければならない。で、声を掛けるというんでもね、とにかくは、相手から声が返ってくるまで声を掛けないと、声を掛けるという行動の意味がないんだ。途中でやめてしまったらゼロだ。とにかく関係修復したいと思ったら、こちらからですね、相手から声が返ってくるまで、毎日、毎日、何百日でもとにかくは声を掛け続ける。会ったらおはよう、おはようと声を掛け続ける。必ず、いつかどっかで相手からも、おはようと声が返ってくるときがくる。返ってこないことは絶対ないんだ。**

**これはもう理屈じゃない。信念。その信念が強ければ強いほど、より早く相手から声が返ってくる。確信を持って声を掛ければ、相手から意外と早く声が返ってくる。声を掛け続けるっちゅうことは、それほどまでに関係修復を望んでおるんだということをね、強く相手に印象付けることになりますからね、その思いが相手に伝われば、相手からより早く声が返ってくることになります。相手からも声が返ってくるっちゅうことは、どういうことなのかといったら、相手からもこちらのほうに心の橋が渡り始めたという現象なんですよ。で、心の橋を渡るっちゅうのはどういうことなのかといったら、相手からこちらのほうに声が返ってくるということは、少しずつ相手が、こちらのほうに心を開き始めてるという、そういうこの現象なんですよね。で、相手がこちらのほうに声を返してくれて、で、相手が心を開き始めると、突然ね、相手のいいところが見えてくるんですよ。**

**これは普通の社会生活でもね、それまであいさつを交わしてなかった人と、あいさつを交わすようになってくると、あいさつを交わすようになってくるだけで、その人がいい人に見えてくるんですよね。あいさつを交わしてないときは、全然いい人も悪い人も、そんな関係ないんですけど、あいさつをし始めると、なんかいい人に見えてくるんですよ。いいところが見えてくる。その人の。あいさつを交わし始めると。で、相手からこちらのほうにおはようと言ってくれるようなことになってくると、だんだん相手の中に**

**相手のいいところが見えてくる。で、そういうところからですね、どういうふうに持っていくかといったら、関係修復したいと思ったら、相手のいいところが見えたならば、相手の中にいいなというところのものを見いだしたならば、それをですね、こちらのほうからちょっとオーバーに褒めるんですよ。いいなと思ってる程度に褒めてたら、あんまり相手は喜ばない。ちょっとオーバーに褒めるとね、そんなに俺のことを評価してくれておったのかという、そういう喜びに変わるんですね。だけど、あんまりまたオーバーに褒め過ぎちゃったりすると、ほめ殺しになっちゃったりなんかして、何をうそっぽいことを言うとるんやって、かえってむかついてきたりなんかしてですね、かえって人間関係、悪化する。**

**だから、褒めるときには、ちょっとオーバーっちゅうのは、ものすごくね、大事なさじ加減っちゅうか、塩加減というか、砂糖加減と申しましょうかね、このちょっとだけよというのが、非常にこう効くわけですよね。とにかく褒めるときにはね、ちょっとオーバーっちゅうのは、ものすごく大事なんですよ。ちょっとオーバー。これは子どもを褒めるときでもそうですよ。夫婦でもお互いに褒めるときは、ちょっとオーバーに褒めるんですよ。すると、なんとなくうれしくなっちゃったりなんかしてね。そうなると、どうなるかといったらね、その褒めて、ちょっとオーバーに褒めてあげると、褒められるとね、褒めてくれた人に対しては、褒められたところのものを出しながら付き合いたい。そういう気分になってくるんですよ。褒めてあげるとね、そうすると、褒めてあげたところのものを出しながら、その人は自分に付き合ってくれるというね、そういう意識に変わってくるんですよ。で、褒めてあげたところのものを相手が出しながらこちらに付き合ってくれるから、だんだん、だんだん、その人がね、好きになっていってね、そして、やがて、その相手を見る目の中に、最初は嫌なやつやなっちゅう目だったんだけど、だんだん褒めとる間に、本当に相手のことが本気に好きになってしまって、ええ人やんかというのは、そういう感じのね、目で相手を見るようになってくる。で、この目の変化がね、人間関係を急速に改善していくという、そういう効果を持ってる。**

**人間関係修復のターニングポイントはね、目なんですよ。相手を見る目が、嫌なやつやなという目から、ええやつやんかって、そういう目に変わったときにね、相手はこちらに対して態度を変えてくれる。言葉で褒めてる間は変わらない。絶対、人間は。目が変わったときに変わるんだ。目に反応するんですよ。目と表情、態度に反応する。だから、よく嫁しゅうとめのね、問題がなかなか難しいというでしょう。あれは別に面と向かって大げんかしてるわけじゃないんだ。面と向かったときは、お互いにいいことを言い合ってる。だけども、言葉ではいいことを言うとるんだけど、目が強烈に睨んじゃってるんですよね。だから、もう完全に目を見たら、もう嫌やっちゅう感じがもう歴然としてる。しかも、心にもないことを言うてるもんですから、顔は笑っててもですね、目の端がピクピクピクッと、こう動いとったりなんかしてですね、なんや、嫌な感じやなということになってきますしね、ちょっと一瞬、もうちょっとでも一緒におりたくないという感じで、こう態度が逃げ腰になってるもんですからね、早くその場を去りたいという、そういう態度がこう目に見えてるもんですから、言葉でどんなにいいことを言っておっても、嫁しゅうとめの関係はなかなかこれ、修復できないんですよね。**

**で、いかにね、人間関係においてね、この目と表情、態度というものの変化がね、ものすごく大きな影響力を持つかということを人生においては知らないといけないんですね。ちょっとした嫌な目つきが、完全に人間関係を決裂させてしまう。ちょっと嫌な表情が、もう嫌いっちゅうことになってしまったりする。ちょっと気に障る態度がね、もう完全にその敵味方になってしまう。それほどにこの心の表現としてのね、目つき、表情、態度の変化っちゅうのは、ものすごく恐ろしい。その代わり、それをよく利用すればね、どんな人間関係でも修復できる。とにかく声を掛け続ければ、声が返ってこないときはないんですから。この力さえ持てばね、どんなに悪化した人間関係でも、確実に必ず修復できる。修復できない人間関係はないんですよ。その意味で、このどんな人でも好きになる実力というのはね、この悪化した人間関係を修復する実力の中での第１原理なんですよ。これさえできたならば、修復できない人間関係はない。そういう原理ですから。**

**で、次は第２番目です。第２番目は、誰からでも好かれる実力。誰からでも好かれるなんていうようなことは絶対ない。誰からでも好かれるっちゅうのは絶対ない。だけどもですね、だけども、このできるだけより多くの人から好きになってもらえるという自分をつくる。これもやっぱり、悪化した人間関係を修復する力をつくるためには、ものすごく大事な努力の仕方です。で、誰からでも好かれる実力というのはどういうことなのかといったら、言葉を換えれば、かっこの中に書いてあるように、人間的魅力の形成ということになるわけですね。人間的魅力。人間的魅力をどうつくっていくかということを考えなければならない。魅力とはなんなのか。魅力というのは、人を感動させることができる要因のことを魅力といいます。魅力というのは、人を感動させることができる要素。人を感動させることができる要因のことを魅力といいます。自分の中にどの程度、人を感動させることができる要素があるか。力があるか。それが人間的魅力を持った人間か、ないかということを、決めるわけですね。人間的魅力を持った人間になろうと思ったら、自分の中に何かしら、人を感動させることができる要因、能力、要素というものをつくっていかなければならない。この人を感動させることができる要因を持ったならば、人間関係はものすごく修復しやすくなります。感動というのは、心を動かすことになりますからね、だから、非常にその関係を修復するということについては大きな力になってきます。**

**じゃあ、人間において、人を感動させることができる要因とはなんなのか。それを学問的に考えていくとどうなるかといったらですね、人間というのは、理性、感性、肉体という３つの要素からできてますので、人間には理性的魅力と、感性的魅力と、肉体的魅力という３つの魅力の要因があります。人間は理性、感性、肉体という３つの要素から、人間の命はできておりますので、人間における魅力、人間的魅力というものには、３つの種類の、３種類の領域があって、理性的魅力と、感性的魅力と、肉体的魅力という、この３つの魅力の内容があります。で、理性的魅力の中にも、３つのね、内容があって、感性的魅力の中にもまた３つの内容があって、肉体的魅力にもまた３つの魅力があります。全部で９つの魅力が人間にはあるんです。『銀河鉄道999』じゃありませんけどね、この人間には理性的魅力と、感性的魅力とね、肉体的魅力というね、この３つの魅力があって、で、またそれぞれに３つの魅力が内容としてあるもんですからね、３掛ける３が９で、『銀河鉄道999』なんですね。**

**まず理性的魅力とはなんなのか。理性的魅力の第１番目はね、知識の量。知識の量が人を感動させる。いわゆるこの並外れた知識の量というものがね、人を感動させる。プロというのはね、やっぱり、素人から見てね、さすがですねとこう言われるぐらいのですね、やっぱり、その仕事における知識量というのを持ってないと、プロとは言えない。知識の量は人を感動させるといっても、半端な知識の量じゃね、感動しません。やっぱり、さすがというね、そういうこのレベルの知識量というのが必要なんですよね。で、昔、『クイズ王決定戦』というテレビの番組がありましてね、『クイズ王決定戦』。もう最近は多分、なくなってると思うんですけど、『クイズ王決定戦』というのは、アナウンサーがクイズを出して、ボタンの早押しで、この勝ち負けを決めるわけですよね。で、それがもう地方予選を勝ち抜いてね、チャンピオン大会に出てくるわけですよ。で、チャンピオン大会でも、準決勝、決勝に残るような人というのは、本当にもうあきれかえるほどの知識量でね、36冊もあるような百科事典のね、大項目のことについて知ってるのはもう当たり前でね、大項目の中の説明の中に書いてある、その隅っこにちょっと書いてあるようなことまで知っとって、なんちゅう知識やっちゅってね、本当にもう感動ものになるような、そういうこの番組があったんですよ。**

**そういう並外れた知識の量っちゅうのは、確かにね、人間を感動させますよ。だけども、知識の量というものがね、人を感動させることができる魅力になるためには条件がいるんだ。条件があるんだ。どういう条件かといったらですね、その人を感動させることができるような、知識のあり方というのはどういうのかといったら、自分の命から湧いてくる問題意識や、問いや、欲求や、興味や、関心や、好奇心や、認識欲に基づいて獲得された知識しか魅力にはならないんですよ。だから、命から湧いてくるね、命から湧いてくる問いや、問題意識や、興味や、関心や、好奇心や、認識欲に基づいて獲得された知識というのはね、命から湧いてくる欲求に答えが与えられるもんですから、命が喜ぶんですよね。だから、人間的魅力、命の魅力が出てくるんですよ。で、また命から湧いてくるね、問いに対して、答えが与えられれば、その答えは命に染み込みますのでね、いっぺん聞いたら、一生忘れないんですよ。なんでやろうなと思ってね、で、いろいろ調べて、ああ、そうかとわかったらね、一生、忘れないんですよ。だけどね、その受験やとかね、就職やとかっちゅうんで、一夜漬けでね、むちゃくちゃにもう、無理やりにね、覚えたような知識はね、かえって命を苦しませるんですよね。だから、命が苦しいからね、命の喜びがないのでね、人間的魅力にならないんですよ。また、そういう無理やりに覚えた知識というのはね、もうちょっと時間がたったら、すぐ忘れてしまいますよ。だけど、命に染み込んだ知識は忘れないんですよ。命に知識が染み込むっちゅうのはどういうことなのかといったら、命から湧いてくる問いに対して答えを与えるっちゅうことなんです。自分の命から湧いてくる問いに対して答えを与えれば、一生、忘れない。だから、ものすごい莫大な知識量になるわけなんですよ。**

**だいたい体験とか経験というのは、一生、忘れないでしょう、だいたいが。あれは命に染み込んでるからですよ。頭だけの観念の知識はすぐ忘れるんですよ。欲求もなくね、興味もないようなことをね、覚えてもね、これは観念だけですからね、すぐ忘れてしまうんですよ。だけど、命から湧いてくる問いに対してね、答えが与えられれば、その答えは命に染み込んで、命の喜びをつくるんですよ。だから、命は輝いて魅力になってくるんですよ。だから、無理やりに勉強して東大に入ってしまうとね、みんなほとんど精神病ですからね、もう。もう完全に何かしら、固定観念、先入観念に支配されてしまってね、本当にもうなんかこう、自分ながら、自分のことが思うようにならんみたいなね、そういうがちがちの心理状態になってしまって、なんかみんな、自閉症児みたいになってしまってね、表情がなくなってしまうし、なんかぼおっと歩いてるし、なんかこう人間的に覇気がないっちゅうかね、そういう状態になってしまう。それは命が知識に支配されてしまうのね。**

**だから、先生から、先生に出された問題に答えてるというようなね、そういう答えは、命が喜ばないで、かえって命を苦しめますのでね、魅力にならん。自分の命から湧いてくる問いに対して答えを与えれば、その答えは命に染み込んで、命が喜ぶので、永久に忘れないんですね。だから、その知識の量というものが人間的魅力になるためには、自分の命から湧いてくる問題意識や、問いや、興味、関心、好奇心や、認識欲に基づいて獲得された知識であるかどうか。それがこの人間的魅力となる知識になるかどうかを決めるんですね。もっともっと、そういう意味ではね、われわれはいろんなことに対してね、好奇心を持ってね、興味を持って接して、なんでやろうな、なんでやろうなと、そういうふうな気持ちになったりですね、なんか知りたい、なんかもっと知りたいという、そういう気持ちになってくるとですね、いきいきしてきますしね、命が輝き始めますし、なんか勉強したら、全部それ、身に付いてしまうというね、そういうことになって、莫大な知識量がこう、生まれてきます。**

**だから、知識というのは、学校で勉強した知識よりもね、社会に出てから、仕事をしながら、必要に応じて獲得した知識のほうがよく身に付くんですよね。学校で勉強した知識というのはすぐ忘れてしまっても、仕事上、必要でね、この獲得した知識はなかなか忘れません。でも、とにかく原理としては、知識の量というものは、理性という領域におけるですね、人間的魅力の一つだと。莫大な知識量は人を感動させる。ようそんなことまで知っとるなと言ってね、感動される。**

**で、２番目はですね、２番目の理性的魅力は知恵。知恵というのは、その命から湧いてくるもんですけども、知恵というのは、知らんけどもわかってしまう。できんけどもできてしまうっちゅうのが知恵なんですよね。知恵者というのはですね、みんなどうしたらええやろうなと思って、みんな悩んでるときにね、こうしてみたらどうやとこう言えるわけですよね。べつに知っとるわけやないんやけど、こうしてみたらどうやと言えるというね。それは知らんけども、わかってしまう。できんけども、できてしまうというのが知恵の力ですよね。で、そういう知恵者っちゅうのは、やっぱりみんなから尊敬されますしね、みんなから魅力ある人物として評価されます。そういう命から知恵が湧いてくるというね、そういうこの構造を持った自分になろうと思ったらどうしたらいいのかと。知恵が湧いてくるということになるためにはですね、今、自分が持っておる理性能力、理性の力というものが、もう役に立たないという状況にならないと、知恵は出てこないんですよ。**

**理性というのは、今、自分の持ってる顕在能力ですけどね、理性という顕在能力が役に立たなくなってくる。理性ではなんともならん。せやけど、なんとかせんことにはやっていけへんということでね、だけど、なんとかしたいと思って頑張ってると、今、自分の持ってる力ではなんともならんのんだから、だから、なんとかしたいと思って頑張ってると、命に潜在する能力があったら、出てくるという順番がくるわけですね。だから、命から知恵が湧いてくる。命から潜在能力が湧いてくるという、そういう状態の命をね、つくろうと思ったら、まずは今、自分の持っておる理性の限界に挑戦する。限界に挑戦するっちゅうよりは、理性でいろいろやってみてなんともならんっちゅうところで諦めたらいかんっちゅうことですね。理性でいろいろやってみてなんともならん。せやけど、なんとかしたいと思って頑張ってると、そうすると、命に潜在する知恵が湧いてくるという順番がくるわけですよ。今、自分の持っておる力で全部できておったら、もう知恵は湧いてきません。必要がないから。だけど、今、自分の持ってる力でなんともならんという状況に陥って、だけど、なんとかせんことにはやっていけへんと思って、なんとかしたいと思ってると、今、自分の持ってる力でなんともならんのだからということで、命に潜在するものが出てくる順番がくるわけですよ。その意味では、この知恵者というね、そういうものになろうと思ったら、今、自分の持ってる力の限界に挑戦する。今、自分の持っておる知力の限界、気力の限界、体力の限界に挑戦するという、その限界への挑戦という生き様がですね、命に潜在する能力を引き出してくるという、そういうこの働きをします。**

**だいたいその松下幸之助さんとかね、本田宗一郎さんなんていうのは、小学校しか出てへん。だのに、なんであんなすごい会社をつくったんや。あれは学歴がないからですよ。なまじっか学歴があってね、大卒や院卒やっちゅうことになってくるとですね、たくさんの知識や技術の量を持ってるもんですからね、ほとんど、今、自分の持ってる力でね、だいたい対応できてしまうんですよね。だから、なかなか知恵は湧いてこんのですよ。だけど、小学校しか出てへんとね、今、自分の持ってる力が少ないから、すぐ限界に到達するんですよ。限界に到達しても、でも、なんとかやっていかんと、やっていけへんのでね、なんとかしたいと思って頑張るんですよね。すると、今、自分の持ってる力でなんともならんという状況でなんとかしようと思うから、すぐ知恵が湧いてきたりなんかするわけですよね。で、なんで知恵が湧いてくると、あんなすごい人間になってしまうのかといったら、理性というのはね、理性というのは、他人がつくった知識や技術をね、学習して覚えて、自分のものとして使ってるのが理性なんですよ。だけど、命から湧いてくるこの知恵の力というのはですね、なんなのかといったら、これはこの潜在能力が湧いてくる。**

**潜在能力というのは、どこに潜在してるのかといったら、染色体の中の遺伝子なんですよね。染色体の中の遺伝子というのは、これは全人類に共通に与えられてる能力なんですよ。だから、全人類に共通に与えられておる潜在能力が出てくるからね、その力は類の力なんですよね。だから、理性というのは自分が努力して、他人がつくった知識や技術を覚えて、自分の力みたいに使ってしまってるもんですから、自分が勉強して獲得したものという、個の限界がある。だけど、命から湧いてくる知恵の力は類の力だ。類の力だから、個の限界を超えた大きなことができてしまうんですね。これが、この命から湧いてくる潜在能力、知恵の力、気付き、そして、この潜在能力、そういうこのものを原理にして生き切る、仕事をする人間のこの偉大さなんですね。**

**理性というのは、ちっぽけな能力なんですよ。理性というのは、他人がつくった知識や技術を学習して覚えて使ってるだけの話で、理性というのは他人のものをパクっちゃってるわけですよね。理性はパクリの能力や。本当の自分の力じゃない。他人からパクったね、その力が限界に到達して、なんともならん状況に立ち入って、そして、そこから自分の命に潜在するものが湧いてくる。命に潜在するものが湧いてくるから、これが本当の俺の力やと。知恵や、気付きや、潜在能力が湧いてくるというところから、本当の俺の力で生きるという人生が始まるわけですよ。他人から学んだもんじゃなくて、自分の命から湧いてくる。だから、自分のもんだから、応用が利く。だから、すごいことができるし、新しい未来に対応できるんですね。他人から学んだものは過去のもんや。過去に他人がつくったものを学習して覚えただけや。過去の力だからね、だから、なかなか新しい状況に対応できにくい。保守的になってしまう。**

**とにかくそういうことで、この知恵が湧いてくる、知恵者というね、そういう能力を持ちたいと思ったならば、どういうこの努力をしたらよいのか。知恵が人を感動させるというね、そういうふうな生き方ができる人間になろうと思ったら、今、自分の持ってる理性能力でなんともならんという状況になっても諦めたらいかんと。そこまでは助走や。そこまでは、いわゆる三段跳びなんかの助走みたいなもんやと。で、今、自分の持っておる力でなんともならん。そこまでいって初めてですね、その命から本当の俺の力が湧いてくる順番がくるんだ。そのことを忘れたらいかん。理性でなんともならん。だけど、なんとかしたいと思ってると、命から本当の自分の力が湧いてくる。命から湧いてくる力なんだから、俺の力なんだ。俺の命から湧いてくるんだから、俺の力なんだ。そこから俺の力で生きるという、俺の人生、個性の時代を生きる俺の力が湧いてくる。で、その知恵というのはですね、知らんけども、わかってしまう。できんけども、できてしまうという力だから、人を感動させるんですよね。**

**で、３つ目の理性的魅力は天分。天分、素質という天分ですね。人間には皆、天分がある。おぎゃあと生まれ出てきたからには、人間にはみんな、俺にしかできん、ほかの人にはできん、俺にしかできんという能力をみんな与えられて生まれてきてる。それを天分っちゅうんですね。天から自分にのみ与えられた力。それが天分、素質というんでね、いわゆる個性ある、この最も素晴らしい能力を天分といいます。この話も、もうこれまでなんべんもさせてもらったので、またあれかといってね、もう言わんでもわかっとるわということになってしまう人もおると思うんですけど、この天分とはいったいなんなのか。なぜ人間にはね、天分があるのか。なぜ人間には、自分にしかできないというですね、素晴らしい力をみんな与えられてるんだといえるのか。それは、全人類、顔が違う。この顔が違うということがですね、この自分には、自分にしかできないことがある。俺にはほかの人間にはできない何かができる。そういう能力がですね、自分にはあるんだ。それを証明してるのは顔なんですよ。顔の形を決定するのは遺伝なんですよね。遺伝で顔の形はだいたい決まってしまう。遺伝というものをつかさどっておるのは遺伝子だと。**

**遺伝子とはなんなのか。遺伝子っちゅうのは、能力が物質化したもんだ。能力が物質化した遺伝子によって、顔の形が決まって、その顔の形は、全人類、全部違うんだ。ちゅうことはどういうことなのかといったら、顔が違うっちゅうことは、能力が違うっちゅうことなんだ。顔が違うっちゅうことは、この顔の形は遺伝子によって決まるんだから、遺伝子は能力が物質化したもんなんだから、だから、顔が違うっちゅうことは、自分には自分にしかない能力がある。俺には、ほかの人間はできない何かができる。そのことを証明してくれてるのは顔だ。そのほかの人にはできん、俺にしかできんという、その能力をみんな持ってるんだけど、それは潜在能力なんだ。それが出てくれば、天分となってですね、どんな人でもそれが出てくれば、オンリーワン、ナンバーワンか、どちらかにおいて世界一になれる。人間皆、世界一になる能力を与えられてるんだ。顔はもうすでになんも言わんでも、顔は世界一やと。もう俺は俺しかおらんのですからね。自分と同じ顔をしてる人間はおらん。似とるという人はおるけども、似とるということは、ちょっと違うんですからね。だから、もうみんな顔は、ちょっとは違う。だから、もうどんな人でもですね、顔が違う限りは、俺にしかできんという能力をちゃんと与えられて生まれてきてる。**

**じゃあ、その自分が世界一になる能力というのはどうしたらわかるのか。その天分の発見方法があると。で、天分というのは、これは潜在する能力だからね、だから、顕在能力である、理性ではわからない。自分が世界一になる能力を自分が見つけ出そうと思ったら、先天的な能力を用いなければならない。先天的な能力とは、人間においては肉体と感性だ。肉体と感性は、生まれながらに持っておる能力である。肉体と感性を使えば、自分が世界一になる能力を発見できる。じゃあ、どういうこのことをするのかといったらですね、その天分を発見する方法は５つあって、まず第１番目は、やってみたら好きになるかどうか。やってみるっちゅうことは肉体を使うんだ。好きになるかどうかは感性を使うんだ。肉体と感性を使って、自分が世界一になる能力と分野を決定する。その第１番目の方法は、やってみたら好きになるかどうか。やってみて好きにならんことは絶対やったらいかん。やってみて好きになったら、やらんないかん。**

**野球を見とって好きでも、天分には関係ないんですよ。野球をやってみて好きになったら、天分はある。野球をやってみて好きにならんかったら、天分はない。なぜかといったら、能力は遺伝子の中にね、あるのであって、遺伝子っちゅうのは物質だから、肉体なんだ。遺伝子は肉体なの。だから、肉体を動かさないと、肉体を動かさないと、天分があるかどうかはわからないんですよ。観念ではね、観念では、天分があるかどうかわからん。遺伝子は肉体の一部分ですから、肉体を使わないと、その能力が自分に備わっておるのかどうかわからないんですね。やってみんといかん。やってみて好きになったら、天分はある。やってみて好きにならんかったら、天分はない。で、どの程度、好きかによって、どの程度の天分があるかが決まるわけですよ。ちょっと好きやぐらいではちょっとや。めちゃめちゃ好きで、やめられへんというのは、もうダントツになってしまうと。最初はちょっと好きでもね、やってる間にだんだん、だんだん、好きになって、めっちゃ好きになってしまうこともありますからね。とにかく好きなことをやらないかんと。**

**で、２番目は、やってみたら、興味、関心が湧いてくるかどうか。やってみたら、興味、関心が湧いてくるかどうか。やってみても、興味や関心が湧いてこんっちゅうことは、天分はない。やってみたら、なんなく興味、関心が湧いてきた。天分はある。で、次、３番目は、やってみたら、得手、得意と思えるかどうか。これは自分にとって得手なことやな。これは自分にとって得意なことやなと思えるかどうか。やってみたら、これは自分が得意なことやなと思えたら、天分はある。だから、やらんないかん。やってみても、得手とは思えなかったら、もうやったらいかん。４番目は、他人と一緒にやってみたら、いっつも自分のほうがよくできてしまうかどうか。他人と一緒にやってみたら、いっつも自分のほうがよくできてしまうかどうか。いっつも自分が勝ってしまうかどうか。何回か負けることがあったら、もうそのことについては、自分よりも優れた能力を持ってるやつがおるんやから、もう俺はやめとこうと。ほかのことで勝負しようと思わないかん。だけど、やってみたら、誰とやっても自分がよくできてしまうし、いつでも自分がなんか勝ってしまう。これはもう俺に与えられた、これは仕事やな、使命やなと思わないかんと。**

**最後の５番目、最後の５番目は、真剣に取り組んだら、問題意識が湧いてくるかどうか。真剣に取り組んだら、問題意識が湧いてくるかどうか。どんなに真剣に取り組んでも、なんの問題意識も湧いてこないっちゅうことは、もうそこには、その人独特の何かができるものは何もないんですね。真剣に取り組んだら、何かしら問題意識が湧いてくる。問題意識っちゅうのは、ここのとこはなんかもうちょっとなんとかならんのか。ここのところ、もうちょっと納得できんなとかね。ここのところはなんかおかしいんやないかなとかね。そういうこの問題意識が湧いてくる。問題意識が湧いてくるっちゅうことは、自分の命から自分が出てきてるんだ。だから、問題意識が出てくるっちゅうことは、自分が出てきてるんだから、そこには君独特の何かできるものがあるぞということをね、教えてくれてるんだ。どんなに真剣に取り組んでもね、なんの問題意識も出てこん。ただ言われてることを言われてるがままにやってるだけだという状態では、その仕事がどんなにうまくできておってもね、そこにはその人の天分はない。いわゆる、その人にしかできんというものは、そこにはないんだ。個性ある能力はそこにはないんだ。人から与えられた仕事、人から言われた仕事がどんなに上手にちゃんとできておってもね、それは天分とは関係ない。天分があったら、問題意識が湧いてくる。問題意識が湧いてこないと、独特のことはできない。人に言われてることを言われてるままにやってるだけじゃ、奴隷ですから、これは。そこには自分は存在しない。問題意識が湧いてきて、初めて自分独特の何かができるということになってきます。**

**とにかくこの人間には、どんな人間でもね、世界一になることができる能力が与えられてるんだ。そういう世界一になる能力を与えられて、みんな生まれてきてるんだ。なぜか。人間は歴史をつくるために生まれてくる。人間はみんな、何をするために生まれてくるのか。人間はみんな、歴史をつくるために生まれてくる。新しい時代を呼び起こすために生まれてくるんだ。新しい時代をつくろうと思ったら、今までの過去の人間は誰もやったことがないことをしなければ、新しい時代はつくれないんだ。だから、生まれてきた人間はみんな、過去の人間が誰もやったことがないことができるという能力を、みんな授かって生まれてきてるんだ。もう100年前の人間は、携帯電話もなかったしね、携帯電話もパソコンも使えませんからね。だけど、今の人たちは、もう小学校でもパソコンを使ってゲームをやってますからね。それが証拠で、とにかくは、新しく生まれてくる人間は、過去の人間が誰もやったことがないことができるという力をみんな与えられて生まれてくるんですよ。だから、歴史がつくれるんですよね。で、しかも、その過去の人間が誰もやったことがないことができるという能力を一人一人が持って生まれてくる。で、一人一人がみんな違う能力なんだ。だから、一人一人、みんな違う仕事をして、違うことをして、歴史をつくることができると。そういうこの状態で生まれてくる。**

**なんで、その今、申し上げたね、やってみたら好きになる所さんね、やってみたら興味、関心が湧いてくる所ジョージさんね、やってみたら得手、得意と思える所さんね。で、その他人と一緒にやってみたら、いっつも自分がよくできてしまう所さんね。で、その真剣に取り組んだら、問題意識が湧いてくる所ジョージさんね。なんでこの５つの所ジョージさんがですね、天分の発見方法だというふうに言えるのか。それは、世の中で成功した人はね、みんな好きなことをやって成功したか、興味、関心のあることをやって成功したか、得意なことで頑張ったか、人よりもよくできてしまうところでもっと努力したか、問題意識に人生を懸けたか。この５つしかね、現実の社会における成功パターンはないんですよ。で、この現実の世界における成功パターンと、人間の能力の原理におけるですね、この５つの原理とが、ぴったりがっちり、完全に一致するということがすごいことなんだ。本質と現象が一致する、原理と現象がぴったり一致する。だから、この原理は現象によって証明された原理なんだ。だから、確かなことなんだ。**

**実際問題、嫌いなことをやって成功した人はいないし、興味、関心がないようなことで成功した人はいないし、不得手なことで成功した人はいないし、人よりも劣ってるようなことで成功した人はいないし、問題意識もないようじゃ、新しいことができるはずはないわけですよ。だから、世の中で成功した人は、この５つの原理でしか成功してないんですよ。だから、これはすごい原理なんだ。だから、この５つの方法で、自分の天分の所在を模索してね、そして、この５つの方法でいろいろ探り求めていって、一番強烈なものが自分の命から湧いてくるところ、それが自分の天分のツボ、命の使いどころのツボなの。もうツボにはまっちゃったら、すごい人生ですよ、これはもう。笑いが止まらん、とにかくは。金はもうかるわね、もうなんでもかんでも全部うまくいってしまう。ツボにはまる人生ね。もう左うちわどころじゃない、両うちわであおいじゃったりなんかして、風邪を引いちゃうぐらいあおがないかんぐらい、うはうはの人生になってしまう。で、みんなそれができるんですから。この５つの方法のどれかで頑張ったら、みんなそうなるんですよ。だけど、残念ながら、みんなそうじゃないんだ。みんな好きじゃないところで頑張ってるんだ。みんな、興味、関心のないところで頑張ってるんだ。みんな不得手なところで頑張ってるんだ。他人よりも劣ってるところで頑張ってるんだ。問題意識のないようなことをやらされてしまってる。だから、成功はできない。平凡で終わってしまう。**

**で、どんな能力でもね、どんな仕事にも使えるんですよ。この会社におったら、この能力は使えんというようなものはないんですよ。どんな能力でも、どの仕事でも使える。だから、会社が変わらんと、この能力は発揮できんっちゅうようなもんじゃないんですよ。能力はどんな仕事にも全部適用しますよ。ただ、今、自分のやってる中で一番好きなことをする、一番興味、関心のあることをするって、そういうこの自分の道の決め方をしていかないと、能力は発揮できないんですね。建築の勉強を大学でやったからね、建築会社に就職せんといかんと思ったら、これは考えが浅い。建築の勉強をした人間でなければ書けない小説があるんだ。建築の勉強をした人間でないと撮れない写真があるんだ。建築の勉強をした人間でなかったらできない保険の仕事もあるんだ。どんな能力でも、全部の仕事に生かせるんですよ。そういう意味で、とにかくはね、今、自分のやってる仕事の中で一番自分が好きなこと、興味があること、得意なこと、人よりもよくできてしまうところ、問題意識が湧いてくるところ。このどれかのツボにはまってやらんことには、頭角は表せないんですね。そういうことをちょっと考えてみてもらいたいと。もう６時半済んでしまいましたので、これでちょっと休憩を入れて、またあとの話をします。どうもありがとうございました。**

**（休憩）**

**芳村：それでは、後半の話に入りたいと思います。この人間的魅力の形成という話でですね、第１番目のこの理性という領域において、人間的魅力になり得る要因とはなんなのか。それを今、話しました。知識の量と知恵と天分ですね。で、次はこの感性的魅力、感性という領域において、人間に感動を与えることができる要因とはなんなのか。で、感性というこの領域において考えることができる感性的魅力というものにも３つの内容があります。まず第１番目は意志の力。２つ目、愛の力。３番目は人間性ですね、人間性。意志の力と愛の力と人間性。意志の力が人に感動を与えるということはどういうことなのか。意志の力における感動というのは、不撓不屈の意志というふうに呼ばれる、どんな困難でも乗り越えていくぜ。そういうこの不撓不屈の意志がですね、人間に感動を呼ぶ。じゃあ、不撓不屈の意志とはいったいなんなのか。やっぱり人生において、この非常に大事なものに意志の強さというものがあります。意志の弱い人間は、物事を最後までやり通すことはできない。物事を途中で放棄する。意志の強い人間しかですね、人生において、この納得できる結果というものを出すことはできません。**

**じゃあ、その意志の強さとはなんなのか。これまではですね、意志の強い人間というのは、理性的な人間なんだと言われてきました。すなわち、これまでの人間観において、意志の強い人間というのは、この意志の強い人間というのは、自分のしたいことは我慢して、しなければならないことが最後までちゃんとできる。そういう人間が意志の強い人間だと言われてきた。すなわち、意志の強い人間とは、我慢できる人間だった。我慢できないやつは駄目だ。我慢できる人間は立派な人間だ。そういうふうに言われてきたのが、これまでの人間観でした。だけども、そういうこの自分のしたいことは我慢して、しなければならないことを最後までちゃんとやってしまう。そういう意味での意志の強さというものはですね、何かしら我慢しなければならないものが片っ方にあるだけ、もうすでにその意志の強さには限界があるというふうに言わなければならない。すなわち、理性によって、理性によって作為的に、このつくり出されたですね、意志の強さというものは、そのことができないような状況になってくると、また理性はやめる理由を考えてやめてしまうんだ。だけども、本当にわれわれが人生において望むものは、どんな困難でも乗り越えていくというふうな、不撓不屈の意志である。どんな困難でも乗り越えていくっちゅうことは、その根底に理屈抜きのものがなければですね、どんな困難でも乗り越えていくというふうな理屈抜きの意志の強さは出てこない。**

**じゃあ、意志の強さにおける理屈抜きの根拠、原理とはなんなのか。それは、命から理屈抜きに湧いてくる欲求の強さ、欲望の強さ、興味、関心、好奇心の強さ、命から理屈抜きに湧いてくる欲の強さが、結局、薬局、郵便局と申しましょうか、この本当の不撓不屈の意志というね、意志の強さにこのなってくる根本の力なんですよね。いわゆる意志の強い人間とは、理性的な人間じゃない。本当の意志の強い人間は、欲求の強い人間だ。欲望の強い人間だ。本当にわれわれが、不撓不屈の意志というものを持って人生を生きていこうと思ったらですね、命から湧いてくる欲求を、欲望を強めなければならない。欲求を大きくしなければならない。でなければですね、この意志の強い、そういう生き方はできません。なぜかといえば、命から湧いてくる欲求こそ、行動力なんですからね。命から欲求が湧いてこなくなったら、人間は行動をやめてしまうんですよ。命から湧いてくるものがある限りにおいて、人間は行動するんだと。命から湧いてくる欲求こそ、まさに意志の強さの根拠になるものであって、行動力の原理だ。いかなる理想も命から湧いてくる欲求というこの行動力なしに実現されない。**

**欲求なしに理想を描いても、それは空想だ。絵に描いた餅だ。理想というものが欲求と結び付いて初めて理想は実現できるんだ。だから、われわれは、もっともっと自分の命から湧いてくる欲求、欲望、興味、関心、好奇心というものを強めていくというですね、そういう努力をしなければならない。だけど、俺にはそんな激しい欲求が全然湧いてこんぞと。だいたい何がしたいのかもわからんような状態だと。そんな命から湧いてくるような、押しとどめ難いですね、押しとどめ難く命から湧いてくるような欲求なんて全然ない。それはなんでなのか。それは人間の本質というのは、この心であって、心とは意味と価値を感じる感性だ。意味を感じないとやる気にならん。価値を感じないと命は燃えない。人間の心は意味と価値を感じる感性だ。意味を感じないでやる気にならん。価値や素晴らしさを感じなければ、命は燃えないんだ。火が付かないんだ。命から激しくこの突き上げるごとく湧いてくるものがない。それは意味を感じてないからだ。価値や素晴らしさを感じてないからだ。事実や知識や情報をいくら持っておっても、意味を感じなければ、感じなきゃ燃えないんだ。感じてこそ燃える。感じなきゃ燃えないんだ。しかも、意味と価値と値打ちと素晴らしさを感じなかったら、燃えられないんだ。命から湧いてくるものは出てこないんだ。**

**だから、本当に何かしら、この押しとどめ難いね、欲求、欲望に基づいて、人生を燃えて生きる、力強く生きるという、そういう生き方をしようと思ったら、自分の命から激しい欲求が湧いてくる自分っちゅうのをつくらんないかん。どうしたらそれができるのか。そのためにわれわれは理性を使わなければならない。理性を手段能力に使って、今、自分のやっておる仕事の意味や価値や値打ちや素晴らしさを考える。理性が今、自分のやってる仕事の意味や素晴らしさを考えると、理性が考えた意味や素晴らしさを感じる感性がだんだん成長してくる。で、感性がその意味と素晴らしさを感じたとき、命に火が付く。感じたとき、われわれの命から欲求、欲望、関心が湧いてくる。興味、関心が湧いてくる。興味、関心が湧いてくれば、それが欲しくなってくる。求め始める。そういうふうにしてわれわれは、命から抑え難きものとして湧き上がってくる、欲求、欲望をつくらなければならない。そういう人生を生きる力をつくっていく方法論をね、ちゃんと知ってないと、われわれは燃える人生というものを手に入れることはできません。**

**だけど、命から湧いてくる欲求、欲望だけじゃ、これは野獣だ。人間じゃない。だけども、人生を燃えて生きる。本当に感動的な人生を歩もうと思ったらね、根源的にはやっぱり、命から湧いてくる欲求、欲望が大事なんだ。欲求のない、欲望のない人間は、自分のない人間だ。まずは欲求、欲望が湧いてこなければ、人生、話にならん。だけど、欲求、欲望だけでは野獣だ。欲求、欲望はまだ意志ではない。意志の強い人間とはどういう人間なのか。それは命から湧いてくる欲求、欲望というものをね、どういうふうにして実現していくか。そのことを理性で考えて、よし、この方法で実現していこう。この道でやっていこうということを、この理性で考えてね、決める。それを決断というんですけど、決断したとき、意志になる。欲求、欲望というものをどういう方法で人間的に実現していくか。それを考えるのが理性ですよ。理性で欲望、欲求を実現する道を決めたとき、そこに意志ができ上がるわけですね。**

**で、決めるっちゅうことはどういうことなのかといったら、こういう方法もある、こういう方法もある、こういう方法もある。その中のどの方法でやるかっちゅうことを決めたときですね、意志になる。ということは、決断によって意志は生まれるんだ。意志の強さが人間に感動を呼ぶという、その原理は、決断というこのことをどういうふうにするかということによって、それは決まる。決断によって、欲求は意志になるんだ。じゃあ、いったい決断とはなんなのか。決断というのは、普通、決断っちゅうことは、多くの中から何かを選び取ることなんだと、こう思ってる人が多いんですけど、それだけでは決断の中の決だ。断、断つということはいったい何を断つのか。それがちゃんとわからないと、本当の意志の強さは生まれてこない。決断とはなんなのか。決断というのは、こうもできる、ああもできる、どうもできる、そうもできる。その中からですね、よし、この方法でやっていこうということを決めたならばね、何か決めたならば、そのとき、自分が採らなかった方法の中に、どんなに捨て難い、素晴らしいものがあっても、あるもの、ある道を決めたならば、他のものへの思いを断ち切る。自分の逃げ道をふさぐ。もう俺にはこの道しかないというふうに、この自分が決めることが決断なんですね。**

**結婚なんかでも、この多くの人から、この人が自分にとって最高だと思ってその人を選ぶ。だけども、なかなか人間は不完全だからね、ついついひょっとしたら、あちらのほうがええかなと思ってしまったりする。だけども、この多くの中から、ある人を選んだならば、そのとき自分が選び取らなかった人の中に、どんなに捨て難い、素晴らしいものがあっても、ある人を選んだならば、そのとき、そのとき、自分が選び取らなかったものへの思いを断ち切ってしまう。それが決断なんだ。それをしていかないと、人生は迷いに陥る。ある人と結婚して、必ず人生には問題が出てくる。人間は不完全だからね。必ずどんな素晴らしい人と結婚しても、人間皆、不完全だから、必ず問題と悩みは出てくるんだ。で、問題と悩みが出てきたときにですね、この人と結婚したから、こんな問題、悩みが出てきちゃったので、あちらの人と結婚しとったら、こんなことにはならなかったのに。これは理性故の迷いっちゅうんですよ。理性故の迷い。理性は人間に完全性を求める。だから、問題が出てきたら、これは間違いだと思うのが理性だ。だけども、この人間は不完全だから、誰と結婚しても必ず問題は出てくる。問題の種類は違うけどね。だけども、誰と結婚しても必ずその人と結婚しなければ出てこない問題と悩みと苦しみにはぶつかるんだ。問題のない人生はない。悩みのない結婚はない。苦しみのない家庭生活はないんだ。みんな苦しむんだ。みんな悩むんだ。**

**だけど、そのときですね、その決断してないと必ずね、この人と結婚したから、こんなことになっちゃったので、あちらの人と結婚しておったら、こんな問題、出てこなかったのにというふうな、そういう迷いに陥ってしまって、みんな人生に失敗する。不幸になってしまうんですよ。そうならないためにはね、ある人と結婚したならば、必ずそのとき、自分が結婚相手として選べなかった人にどんなに素晴らしい点があってもね、ある人と結婚したならば、他の人の思いは断ち切ってしまわないと、素晴らしい人生は歩めません。意志が強い人というのは、どんな問題が出てきても、それを乗り越えていく人なの。そういうこの意志の強い感動の人生というものをね、歩んでいこうと思ったら、とにかくあるものを取ったならば、そのとき自分が選び取らなかったものの中にどんな捨て難いものがあっても、あるものを取ったならば、他の可能性を全部断ち切って、捨て切ってしまう。この捨てる勇気が決断なんですね。そして、ある人を選び、ある道を決めたらならば、もう俺にはこいつしかおらん。もう俺にはこの道しかないんだ。だから、もうどんな問題が出てこようと、あとはばかになって、出てくる問題をしらみつぶしに乗り越えていくしか、俺の人生はないと思ったとき、人生に感動が始まる。**

**それが不撓不屈の意志、どんな困難でも乗り越えていくぜという不撓不屈の意志がそこででき上がるわけだ。どっか逃げ道が存在する限り、不撓不屈の意志は存在しない。逃げ道はない。もう俺にはこれしかないんだ。だから、どんな問題が出てこようと、出てくる問題を乗り越え続けるしか、俺の人生はないんだ。そう思ったとき、初めて人生には感動が生まれる。そして、人生には奇跡が始まるんだ。最高に素晴らしい人生が始まるんだ。それが不撓不屈の意志、意志の強さというのはそういうもんなんですね。そういうものに出合ったとき、人間は感動するわけですよ。ひょっとしたら、あちらのほうがよかったんじゃないかなって、そういうことを言うてる人には感動せえへん。もう俺にはこいつしかおらん。ほかの道はないんだ。もうどんな問題が出てきたって、俺に任せとけ。俺がなんとかしたる。心配すんなと言って、出てくる問題をしらみつぶしに乗り越えていく。そこに人生の感動が生まれてくる。それが不撓不屈の意志だ。この意志の強さが感動を呼ぶというね、そういうこのドラマです。**

**次、愛の力ですね。愛の力も人間は深い愛に感動する。深い愛に感動する。深い愛とはなんなのか。愛の実践的な原理は努力なんですよね。愛があるかどうかは、相手のために努力できるかどうかによって決まるんだ。相手のために努力できなくなれば、愛はなくなってしまったんだ。相手のために努力できる気持ちがある限りにおいて、愛は存在する。どの程度の努力ができるかによって、愛の深さと強さは決まる。愛の実践的本質は努力だ。そして、愛の感動はどこから生まれてくるか。愛の感動はどこから生まれてくるかといったら、相手のために自己犠牲的な努力をして、しかも、その自己犠牲的努力を喜びとするところに愛がある。そこに愛の感動が生まれてくる。相手のために自己犠牲的努力をして、自己犠牲的努力をしたと思っておったんじゃ、これは愛になってないわけですね。その相手のために自分の大事なものを犠牲にして、相手のために尽くす、その努力が自分にとってうれしい、喜びとなったとき、そこに愛の感動が生まれてくる。**

**お父さん、お母さんの子どもに対する愛というのは、いったいどういう愛なのか。それはお父さん、お母さんが、どんなに自分の子どものために自己犠牲的努力を払ったか。その親が子のために払う自己犠牲的努力のこの量と質が、親の愛の深さを決定する。しかも、親というのは、だいたい自分の子どものためにいろいろ努力しながら、その子どものために努力することを喜びとしてる。それが親の愛だ。そういう愛によって、みんなこんなに大きく成長してくることができたんですよね。夜も寝ないでね、泣く子をあやして、おっぱいあげて、おしめを替えて、自分の仕事を犠牲にしてまで、仕事を辞めてまで、子どもを育てて、病気になったっちゅったら、お父さんがおんぶして、病院に駆け付けていって、とにかくいろんな意味で、時間的にも、お金においても、物質においても、いろんな意味で、大きな自己犠牲的努力を払わなければね、子どもは育たない。だけど、そうすることに親は喜びを感じている。それがその理屈を超えた親の愛のすごさだ。他人ではそんなことはできない。そういうこの自己犠牲的な愛がなかったならばね、絶対、子どもは育ちません。自分にとって子どもは邪魔だと思ったら、そこには虐待が生じますし、もう生みっぱなしで、放ったらかしにされれば、子どもは死んでしまいます。とにかくそういう愛の感動というのはね、愛は努力だから、だから、愛の感動はどこから生まれてくるかといったら、この愛というのは、他者中心的な心の働きなので、他者中心的な心の働きなので、相手のために自己犠牲的努力をして、自分を無にして、相手のために尽くして、それがうれしいというのが愛の感動なんですよね。そういう状況を見たとき、われわれはドラマを見ておっても、そこに感動して涙を流す。いわゆる愛の力が人間に感動を呼ぶというのは、そういうこの誰かのために自己犠牲的努力を払いながら、それを自己犠牲と感じないで、それを喜びとしてそれをしてるという、そういうこの状態のあり方にですね、そういう愛に人間は感動というものを覚えて、むせび泣くような、そういうことになってくるわけであります。そういうこの深い愛に人間は感動する。そういうこの愛の極致はね、この人のためだったら死んでもいい。この人のために生きて、この人のために死ねたら、もうなんにも言うことはない。そういう思いにまで、その自己犠牲的愛は高まっていくわけですよね。だから、よくドラマなんかに出てくるように、ある人が鉄砲で撃たれようとするときにね、一瞬、そのある女性がその好きな男の前にぱっと立ちはだかって、自分が撃たれて死んでしまって、で、その男の人が、その鉄砲で撃たれた女の人をこう抱きしめてね、ほんで、なんか、そういう状況でこう皆、感動するわけですよね。**

**愛の極致は、愛するとは死ぬことだ。死ねるというところまでいったときにね、もうそれ以上の愛はないというね。だから、親は子のためなら死ねる。本当に好きになれば、もうこいつのためになら死ねるというね、そういうふうな気分にもなってくる。そこに感動というものがね、生まれてくるわけであります。よく会社なんかでも、部下のためなら死ねるという、そういう上司のもとにしか、上司のためなら死ねるという部下は育たないと。部下のためになら、一肌でも、二肌でも脱ぐぞというね、そういう上司のもとで初めて、上司のためになら、一肌でも、二肌でも脱ぐという、そういう部下が出てくるんだというようなことがよく組織論でも言われますけど、それも愛の組織におけるあり方ですよね。そういうこの愛の究極の姿の自己犠牲というのは、死ねるというね、命さえもいらんという、そういうこの状況のところで、愛の最高の姿がこう出てくるわけですよね。だけど、死んじゃっちゃ、おしまいですのでね、死んでもいいという思いで生きるところにも感動があるので、すぐ死んじゃっちゃ、これは話にならんので、死ぬという思いで生きて、相手のために尽くすというね、そこにこの愛における自己犠牲的努力の感動がこう生まれてきます。**

**で、３つ目は、人間性ですね。人間性も人に感動を呼ぶですね、原理だと。この人間性とはなんなのか。人間性というのは、この性格という格と人格という格が絡み合って、人間性というのをつくるんですよね。で、性格というのは、これは気が付いたときにはこういう性格になっちゃってたというね、そういうもので、性格は自分でつくるもんじゃない。なっちゃうもんなんですね。なっちゃんって、ジュースもあるんですけれども、なっちゃうもので、なっちゃうものは、もうこれ、なってしまうんで、自分でどうしようもないもんですから、これはもうどうしようもないもんで、性格はもうこれは、どんな性格でもなってしまうもんだから、自分でそれを引き受けて、生きていくしかないというようなね、そういうもんです。だけど、その性格にもね、やっぱりプラス面とマイナス面があって、その性格のプラス面が出てくると、好かれるわけですよね。またその性格のマイナス面が出てくると、嫌われてしまう。だから、その性格のプラス面が出てくれば、そばにいてくれるだけでいい、黙っておってもいいんだよと、そんな感じにこうなってきてしまうこともあるわけですよね。だけども、それはプラスに出たらそうなんだけど、マイナスに出たら嫌われてしまうようなもんで、不安定なんですよね。そこで、その性格の持っておるいい面だけが出てくるようなね、そういう状態に持っていくと、人間性はよくなってきますので、その意味で、この人格的努力というものが、人間性には欠くことのできない重要な要素だ。人間性は性格と人格の絡み合いだ。で、人格というのは、これは人格を持って生まれてくる人間はいない。生まれてから後に人間の格を獲得する努力を人間はして、そして、人間になって、人間の格のある生き方をする。そこに人格というものの必要性が生まれてくるわけですね。じゃあ、人格を磨くとはどういうことなのか。人格というものには、高さ、深さ、大きさという３つの次元がある。人間性を成長させようと思ったら、人格を磨かないかん。人格を磨くとはどういうことなのか。それは、人格の高さを求め、人格の深さを求め、人格の大きさを求めていくというね、そういう努力をすることが、人格を磨くっちゅうことである。人格を磨くとどうなるのか。人格を磨くと、性格の持っておる偏り、ゆがみが修整されて、そして、より多くの性格、より多くの人間性と波長が合うようになってきてですね、人間の幅ができてくる。人間性の豊かさができてくる。心の豊かさができてくる。そして、人格を磨くことによって、性格の持っておるマイナス面があんまり出てこないようになってきて、性格の持ってるプラス面がだんだんよくよく出てくるようになってきて、そして、人間性が成長する、よくなるというね、そういうことになってくるわけであります。**

**その意味で、人間性というものにですね、魅力をつくっていこうと思ったら、人格を磨くということをせんないかん。人格を磨くと出てくる人間的魅力とはなんなのか。それは、人格の高さという魅力、深さという魅力、大きさという魅力。あの人はなんか深いなというね、そういうこの魅力をね、感じさせる人がおりますしね、また度量が大きい、器が大きい、統率力がある、そういう人物の大きさで、また人を感動させる人もいます。人格の高さというものは、これは高貴なる精神といってですね、その人の精神が持っておる、高く貴い輝き、それを高貴なる精神といってね、そういうこの精神の高貴さ、美しさに人間は感動します。そういうものをつくっていくことによってね、人格が人に感動を与えるというね、そういうことになってきて、そして、人間性が人に感動を与えるという、そういう状況ができてくるわけですね。とにかく人間性というものも、この磨いていったらですね、人に感動を与えるという力を持つ。その人間性が人に感動を与えるということの中心になる問題はなんなのか。それは、この人間の格の中に高さ、深さ、大きさというね、この３つの魅力をつくっていく。その高さ、深さ、大きさという、この魅力がですね、人間性の魅力となって、人は感動するわけであります。**

**で、次は肉体的魅力ですね。肉体的魅力というものにも３つの魅力があります。で、肉体的魅力っちゅったら、もうこれはもう、言わずと知れた肉体的魅力でね、プロポーションがね、どうのこうのとかね、ボインだとかね、いろいろそういうこの外形的なね、そういうこの内容で、肉体的魅力ということを言いますけども、それもやっぱり、人間は命の形がありますので、形がある限りは、その形の美を求めていくっちゅうことは避け難いこの努力の方向性なんですよね。だけども、今みたいにですね、ただ痩せておったらどうのこうのっちゅうんじゃ、これは話にならんので、この肉体の魅力といってもですね、痩せりゃいいというもんじゃない。やっぱりこの歴史的に見ると、ルネッサンスの時期にね、この描かれた裸婦の像なんちゅうのは、本当に豊満な肉体を持っておって、それを美とこう言っておりましたから、その時代によっても、人によっても、どういうものを美しいと感じるかは違ってきますので、だけども、やっぱり、それなりにやっぱり、形がある限りは、形の美を求めていくということは、これは避け難いですね、人間的魅力の一端であります。そういう意味では、自分が納得できる、自分が美しいと思えるようなね、そういうこの美の形というものは、それぞれ個性的に求めていく必要がある。どうでもいいというもんじゃないと。肉体なんかどうでもいいっちゅうもんじゃない。だから、みんな、そういう肉体の形については、みんないろいろね、努力して、エステに行ったり、なんやら、ジムに行ったり、いろんなことをしながらね、この苦労をして、そういう美をつくる努力をしてますから、これも当然のことで、それも大事な人間的魅力の一端なんですよね。**

**それから、２番目、それを言葉で言うならば、容姿の魅力といってね、容姿という、そういう言葉でね、肉体的魅力の一端の魅力を容姿というふうに、言うことができます。容姿端麗の容姿ね。で、２番目の肉体的魅力は、目に魅力があるかどうか。表情に魅力があるかどうか。態度に魅力があるかどうか。目つき、表情、態度の魅力。これもやっぱり、人間が肉体というものを持ってる限りはね、肉体によって表現される重要な魅力です。目つきなんちゅうんでもね、よく舞台で、杉良太郎がね、中年の奥さま方に、杉様なんちゅうようなことを言われてね、で、杉様の流し目がたまらんなんちゅうなことを言って、みんなその杉良太郎の舞台を見に行ったりなんかしてますけど、ああいうこの目に魅力というのは、やっぱりこれは本当にこう重要なですね、人間において価値のある要素であります。で、単にそういう流し目がどうのこうのっちゅうんじゃなくってですね、目の魅力の基本はですね、その目に愛があるかどうかですね。どんな人を見る場合でも、その目には、人間を見る目には愛がなければならない。人間だけじゃない。あらゆるものを見る目の中に愛があるかどうか。これが人間的魅力を高めていく、非常に大事な原理です。例え犯罪者を見る場合でも、その目には、相手を非難したり、相手を見下げたりするような目があってはならない。見下げる目は、あるいは、軽蔑する目は、汚れた心を意味する。どんな人を見る場合でも、何を見る場合でも、その目には愛がなければならない。**

**例え犯罪者を見る場合でも、その目には愛がなければならない。愛というのは、好きやっちゅうんじゃなくってね、相手を肯定的に見る。すなわち、罪を犯した人がどんなに苦しんでるか、どんなにこのつらいか、どんなに悲しいか、その罪を犯した人のつらさ、悲しさ、苦しさがわかるというね、そういうこの愛を持ったまなざしで、その人を見つめてあげる。そこにこの目の魅力がこう出てくるわけですよね。いわゆる血の通った温かな心というものを目は表現します。もっともっとわれわれは、そういう意味で目を磨くという、そういう努力をですね、生活の上でも、仕事の上でも、していく必要がある。どんなに頭を磨いても、目が磨かれてなければね、その能力は価値を持たない。能力があればあるほど、かえって人を傷つける。目に愛があることによって、あらゆる能力は生かされて輝く。例え路傍に咲く一輪の花に対してでもですね、愛の目を持って、その花を眺める。愛の目とはなんなのかといったら、その路傍に咲く一輪の花に対してでも、その花のお父さんだったら、その花のお母さんだったらという思いでね、その花を見つめてあげる。それがそのものを見る目の愛だ。犬や猫を飼う場合でもね、ただペットっちゅうんじゃなくってね、その犬の、その猫のお父さんだったら、お母さんだったらというような、そういう思いで、そのペットにね、接する。そうすれば、ペットもそれを感じますからね、だから、全然ペットの性格というか、そういうものは違ってくるわけですよね、感応して。**

**とにかくそういうこの目に愛があるかどうか。非常にこれは大事な目を磨く基準であります。目つきの魅力、表情の魅力、態度の魅力、それだけでも、ものすごく人に感動を与えますよね。よく歌舞伎なんかには、見得を切るというね、そういう動作がありますけど、そういうこの表情の厳しさや、りりしさやね、そういうものによっても、人間は感動しますしね。だらっとした、だらけた表情じゃ、全然、感動しない。なんかもう顔を見てるだけで、凛として、なんか清々しいというんで感動しますからね。タイプやなんてなことを言ってね、私のタイプですなんていうようなことを言って、感動しちゃったりなんかしてね。**

**３番目は、立ち居振る舞い。人間は動物ですので、動物ですね、やっぱり動きというのは非常に大事なこの本質なんですよね。動物である限りは。その動きの中に美があるというのは、非常にこれは大事な文化であります。立ち居振る舞いの美学ね。最近はあんまりそういう立ち居振る舞いの美学っちゅうことは言わなくなりましたけれども、だけど、昔、日本のその武士の時代においてはね、武士は武士なりの立ち居振る舞いの美しさがあった。また、武家の女房は武家の女房で、それだけの格式、品格をですね、立ち居振る舞いによって表現した。また、女の子がお嫁に行くときには、行儀作法を見習えといってですね、自分のちょっとした立ち居振る舞いで軽蔑されて、自分の出てきた家を汚すようなことがあってはならない。そういうことで、嫁に行く前に立ち居振る舞い、行儀作法を見習いに行って、そして、その家においても、自分が出てきたその実家の格をですね、その女の子が代表して示して、そして実家がばかにされないという、そういうふうなこのことを考えておったわけですよね。そういう意味で、結婚する前には必ず行儀作法を見習えといって、そして、その品格を持った行動ができる、生活ができる、そういうふうなことをこう習っていた。**

**そういうこの人間は動物ですから、動きの中に美がなければならない。生きてるということは、動くことであって、動いてないっちゅうことは、死んでるっちゅうことになりますので、そういう意味で、動きというものは、生きてるということの証明になる、非常に大事な原理なんですよね。その動きの中に美があるかどうか。これはものすごく大事な、やはり人間としての、品格、値打ちを示す大きな感動の原理です。だから、芸術家なんていうようなことを言われてるようなね、アーティストなんていうようなことを言われてる方々は、そういうこの動きの中に美を追究するというような活動を皆、やってますから、だから、歌手なんかでも、いろいろ振り付けをね、習ってね、で、歌いながら体を動かして、そのちょっとした動きで人を感動させるというふうな、そういう振り付けを、習うわけですよね。外国なんかからこう、芸術家というか、アーティストが来るとですね、ちょっとした動きにものすごく魅力があってね、なんか歌いながら、すっと手が上がってきてね、で、手がちょっと動くんで、ぞくぞくっとしちゃったりなんかして、風邪を引いちゃったかなと思うような感じで、ぞくぞくっとしちゃったりなんかして、なんかこう、しびれるというようなことになってきたりすることがありますよね。で、黒人なんかでも、ただ立ってるんだけど、立ちながら、ちょっと踵を、ちょっと動かすんですね。ちょっとこう踵を、踵をちょっとずらすだけで、なんかズボンがふらふらっとこう揺れたりなんかしてね、ぞくぞくっときちゃったりなんかしてね。なんかそういうちょっとした動きの中にものすごくこう魅力を感じさせるというね、そういうパフォーマンスがあります。**

**そういうのはこの人間関係の中でもね、そういうこの動きの中に美があってね、そして、何かしら敵方をもぞくぞくっとさせるようなね、そういう魅力があったなら、これは確実に人間関係修復に大きな効果を持ってきます。そういう意味でも、この立ち居振る舞いの美学というのは非常に大事で、これはよく江戸時代の初めとか、明治の当初に日本の武士がですね、欧米を訪れて、そして、その武士の立ち居振る舞いのりりしい姿に欧米人が感動したという話がよくあるわけですよね。そういうこの立ち居振る舞いというものをもっともっとわれわれは大事にしていくというようなことをね、考えないといけないと思います。これから日本人は、アメリカ人に代わって世界の指導者となって、全人類から尊敬されてという、そういうふうなことになっていかなければならない、その意味においてもね、もっともっとわれわれは、自分のこの生き方というものに美学をね、つくっていくような、そういうことを考えていくときが来てるんじゃないかと思いますね。**

**ということで、一応この人間的魅力の形成、誰からでも好かれる実力というものをね、考えていくならば、体系的には、今、話したように、人間は理性、感性、肉体という３つの要素からできておるから、だから、人間には理性的魅力と、感性的魅力と、肉体的魅力がある。そして、理性的魅力にも３つの要因があり、感性的魅力にも３つの要素があり、肉体的魅力にも３つの要因がある。全部で３掛ける３が９のね、『銀河鉄道999』のね、この魅力があってですね、この９つのね、この魅力の中でどれを自分の人間的魅力にしようかというね、そういうふうな考え方で、自分の個性ある魅力づくりというものを、考えていったらいいんじゃないかなと思います。**

**で、次は、第３番目の悪化した人間関係を修復する実力をつくる方法ですけども、第３番目の悪化した人間関係を修復する方法は、対立を乗り越える実力としての愛を養う。対立を乗り越える実力としての愛を養うということですね。対立を乗り越える実力というのはどうしたらつくれるか。これはもう悪化した人間関係を修復する力の中でもメインイベントと言っていいようなね、重要な課題であります。対立を乗り越える実力というものをつくろうと思ったら、対立とはなんなのかということをですね、ちゃんとちゃんとの味の素で、このわからんといかんと。対立とはなんなのか。対立とはいったいなんで出てくるんやと。対立が出てくるのはですね、生まれながらに対立してるっちゅうことはないんですから、後天的な要因である。後天的な要因としてですね、考え方の違いとか、性格の違いとか、立場の違いとか、感じ方の違いとか、そういうものが出てくる。なんでそういう違いが出てくるんだ。それは、５つの要因があってですね、その対立するということの要因としてですね、何があるのかっちゅうたら、体験が違う、経験が違う、学習内容、持ってる知識が違う。それから、出会いの内容が違う。事件と出合ったりね、本と出合ったり、先生と出会ったり、どういう出会いがあるかによっても、また感じ方や、考え方や、立場が違ってくる。最後の５つ目は、解釈が違う。この体験の違い、経験の違い、学習内容の違い、出会いの違い、解釈の違い、この５つがですね、その人間関係の中に対立の要因となるものが出てくる原理であります。いわゆる、この考え方が違うっちゅうことはなんなのか。それは相手が自分とは違う体験をしてる、経験をしてる、自分とは違う知識を持ってる、自分とは違う出会いがある、自分とは違う物事に対する解釈をしてる。であるが故に、この対立が生じるんですね。**

**で、そういうところから出てくる対立というものをですね、乗り越えていこうと思ったらどうするかといったら、どういうふうに考えなきゃいかんかといったらですね、同じ考え方の人間とばっかり付き合っておったら、成長はしないと。人間が成長するためには、自分とは違う考え方を持った人間と付き合って、自分にないものを相手から学んで、初めて人間は成長するのである。だから、この愛の実力を成長させよう、悪化した人間関係を修復する力をつくろうというね、そういう成長をしようと思ったならば、われわれは同じ考え方の人間、対立しないようなね、人間とばっかり付き合っておったんじゃ、成長はしない。だから、対立する人間、自分と違う考え方を持った人間と付き合って、自分にないものを相手から学んで、そして、君と出会って、僕は君からこれを学びました。そして、僕はこんなに成長できました。感謝します。ありがとうっちゅうて、自分と違う考え方の人に感謝をする。そういう気持ちを持ったときにね、われわれは対立を乗り越えていく力というものを、この持つ、成長させるということになるんだというふうに、考えなければならない。**

**だけど、これまでのですね、人類においては、対立という状況が生まれてきたと、どういうことをしてきたか。現在でもそうですけど、対立という状況が出てきて、それに対応するために、今の人類はどうしてるかっちゅったらですね、まずは説得しようとする。説得して、相手を自分と同じ考え方に変えてしまってですね、対立をなくそうとするようなね、そういうことをまず考える。説得っちゅうことは、相手の考えを否定して、自分の考えを押し付けて、自分の考えをわからせて、相手の考えを変えてしまって、自分と同じ考え方に変えてしまう。すなわち、相手の個性を破壊して、相手の個性を奪って、そして自分と同じ考え方に画一化してしまうというね、これが説得という方法であります。それが、もしできなかったらどうするか。今度は妥協点を模索する。お互いに譲り合ってですね、で、そのバランスの取れたところで、一応、仲よくしていこうというね、そういうこの妥協点を模索。だから、妥協点の模索というのは、これはお互いに譲り合って、我慢してですね、この問題を乗り越えようとすることですから、我慢するっちゅうことは、どっか不満が残りますのでね、妥協は必ず、また対立が再発するんですよ。本当の問題解決ではない。**

**またその妥協もできなければどうなるかというと、今度は相手が強いと思ったらですね、相手にこびへつらうということをする。現在、日本が取っておるアメリカに対する対応は、まさにこびへつらいというね、アメリカの気に入るとおりにやってしまうというね、そういうこのアメリカの力によって、日本は守ってもらってるというような意識がまだまだ日本の政治家には強いですから、そのアメリカの言うことに反対したら、日本の国は駄目になってしまうかもしらんというような、そういうこの不安のもとでね、大きい力を持った人間にこびへつらうという、そういう情けない態度を取ってしまう。そういう場合もある。で、こびへつらうことが嫌ならば、第４番目には、逃げるというね、そういうことをする。国際的には、逃げるということは、国交を断絶して孤立するというね、そういう孤立政策を採るというのが、第４番目の方法で、最後、どうしようもなくなったら、けんかや、戦争やとなってしまうと。現在、人類は対立という状況が生じたとき、この５つのですね、対応方法しか持っていない。すなわち、説得か、妥協か、こびへつらうか、逃げるか、戦争か。この５つしかですね、現在、人類は対立という状況に対する対応能力を持っていない。**

**だけど、これではこの対立というものを根本的に乗り越えるというですね、そういうこのことができていないのが現状である。そのために、このわれわれは対立という、この状況をどういうふうに処理したらいいのかっちゅうことを、もういっぺん、考えなければならない。特に個性の時代というのは、みんな違っていいというんだから、ますます対立という状況が増えてくるわけですね。で、その状況でこの対立を放置すればね、至るところでこの人間関係の破綻が生じてくる。それが今の離婚の激増、幼児の虐待、戦争というものの、この現状の姿ですから、どうしたらそれを乗り越えていくことができるのか。そんなことを考えなければならない。そのためにはですね、先ほど申し上げたように、人間が成長するためには、自分にないものを相手から学ばんといかんっちゅうことがありますから、どういうふうに対立を解釈すれば、われわれは対立を乗り越える実力というものを持ってですね、そして、この悪化した人間関係を修復するということが現実にできるのかを考えなければならない。そのためには、対立をどう解釈するかといったら、対立というものは、自分が成長するために学び取らなければならないものを持ってる人間が誰であるかを教えてくれる現象だ。われわれは対立を経験することなしには、自分にないものを持ってる人間が誰であるかを知ることができない。そういうふうなですね、対立に対する解釈をするということがですね、対立を乗り越える実力をつくるために必要であります。**

**すなわち、愛の、より高度な愛の力をつくろうと思ったら、われわれ、対立というものをどう解釈しなきゃならんか。対立というものは、自分が成長するために学び取らなければならないものを持ってる人間が、誰であるかを教えてくれる現象が対立なんだ。対立という現象は、自分が学び取らなければならないものを持ってる人間が今、俺の目の前におるんだということを教えてくれる現象が対立だ。われわれ、対立を経験することなしには、自分が学び取らなければならないものを持ってる人間が誰であるかを知ることはできない。対立を経験することによって、初めてわれわれは、自分にないものを持ってる人間は誰なのかを知ることができる。そういうふうに対立をですね、解釈することによって、われわれは考え方の違う相手を敵として見る。対立心を持って見る。反感を持って見るということじゃなくなってしまって、ああ、この人から、俺は何かしら、教えてもらわんないかんのやな。俺はこの人から何かを学び取らないと、俺は成長できないんだな。そういうこの思いが湧いてきて、そういう目で相手を見るというね、状況になっていきます。**

**いわゆる、この自分が今、敵対している相手は、これは自分にとって先生と言わんといかんような、そういう関係の人なんやと。この人から、俺は何かを学び取らなければ、俺は人間として大きな人間に成長できないんだ。そういう目で相手を見つめればね、相手を敵として見る目から、相手から何か教えてもらわんないかんのやなという目に変わっていく。この目の変化がですね、対立を乗り越えさせるというね、いわゆる相手を敵として見ない、そういうことからですね、相手もこちらに対して睨みつけてくるという状態から、だんだん、だんだん、こう目が変わっていくというね、そういう状態になってくる。そういう流れがつくれる。そのために、人間関係の基本は目なんだから、相手をどういう目で見るかという、目を変えることがですね、人間関係を激変させる非常に大事なポイントである。そのために、目を変えるためには、自分の意識を変えなきゃいかん。そのためには、対立をどう解釈するかっちゅうことは非常に大事である。対立するっちゅうことは、相手が自分にないものを持ってるんだ。俺が成長しようと思ったら、自分にないものを相手から学ばんないかん。そういうことがですね、わかってきて、そして、相手を敵として見るんじゃなくって、相手から何か教えてもらおう。何かしら相手から学んで、自分を成長させよう。そういう気持ちになったとき、人間関係は改善されていくということになるわけですね。**

**そういう意味で、対立を乗り越える実力というのは、対立をどう解釈するかというですね、このことに懸かっておるんだというふうに言わなければなりません。愛するとは学ぶことだ。相手から学ぼうとすることは、愛なんだ。より高度な愛の姿なんだ。相手から学ぼうとしないということは、愛がない。相手から学ぼうとすることは、愛があるんだ。愛するとは学ぶことだ。相手から学ぶことによって、自分が成長するんだ。自分が成長できるんだ。そのことによって、悪化した人間関係を修復する愛の力が自分の身に付くというね、そういうことになってきます。**

**で、次の第４番目は、問題解決能力をつくる。で、対立も問題の一つなんですけども、一般的に言って、悩みとかですね、いろんなこの苦しみとか、一般的な問題をどういうふうに解決して乗り越えていくか。そういうこの一般的な意味での問題解決能力をつくるということもですね、これもやっぱり、悪化した人間関係を修復する上では、その基礎能力としてね、非常に大事な課題になってきます。で、問題解決能力をつくるということをするためには、問題とはなんなのかということを知らんないかんと。問題というのはいったいなんなのか。問題というものは、この決して自分にとってはマイナスの要因ではない。問題はなぜ出てくるのか。問題が出てくるのは、自分を成長させるためだ。問題がなかったら、悩みがなかったら、人間は成長しない。問題、悩みは、自分を苦しめるために出てきてるんじゃない。問題、悩みは、自分を成長させるために出てきてくれてるんだというですね、そういう受け止め方をしていかなければならない。**

**で、なぜ問題は自分を成長させるために出てきてくれておる愛の現象なんだというふうに言わなければならないのか。問題、悩みは、なぜ愛なんだと言わなきゃならんのか。それは問題、悩み、苦しみ、あるいは、この病気になるとかね、倒産するとかね、失敗するとかね、罪を犯すとかね、こういうことは自分で求めてすることじゃない。問題、悩みは、自分が求めて呼ぶもんじゃない。求めずしてやってくるもんだ。求めずしてやってくるっちゅうことは、人智を超えた計らいによって自分に与えられてるんだ。病気も、自分が病気になろうと思ってなるんじゃない。病気にさせられてしまうんだ。これは人智を超えた、自分の力を超えたものによってですね、与えられるもんだ。実際問題、病気というものも宇宙の摂理の力によって、人間の命に与えられるものが病気なんだ。病気も愛なんだ。どういう愛なのかといったら、死んじゃっちゃおしまいだから、死ぬ前に何かしら、今の君の生き方や、心の持ち方や、生活の仕方や、どっかに何か問題があるぞということをですね、宇宙が、母なる宇宙が、自分に教えてくれてるというね、その現象が実は病気になるということの意味であります。**

**それは母なる宇宙の愛なんだ。健康に生きるためにはどうしたらいいのか。死なないためにはどうしたらいいのか。それをその人にわからせよう、気付かせよう、そして、本当に健康な、幸せな人生を生きる力をその人に持ってもらいたいという願う、母なる愛の願いがね、病気をつくるわけであります。しかも、病気というのは、基本的には、宇宙の摂理に反するような生き方を人間がしたとき、病気になるんですよ。だから、君の生き方は宇宙の摂理になんか反してるところがあるよ。そのことを教えてくれるのが病気なんだ。問題、悩みというものもね、これはなぜ出てくるのか。問題がなかったら、成長はない。悩みがなかったら、成長はない。問題、悩みは、その人を成長させるために、何かに気付かせるために出てきてる現象なんだ。すなわち、人智を超えた計らいによって、自分に与えられるものが、苦しみ、悩みである。苦しみ、悩みは、自分が求めるもんじゃないから、だから、人智を超えた計らいによって与えられるもんなんだ。**

**人智を超えた計らいとはなんなのか。それは宇宙の摂理の計らい。宇宙の摂理とはなんなのか。それは自分を生んでくれた母なる宇宙の思い、愛が、そういう問題や苦しみを与えてくれるんだ。なぜ、またそういうふうに解釈せんないかんのか。これは母なる宇宙は、自分が生んだ子どもたちの命を進化させるために、環境の激変という問題を与える。環境の激変がなければ、生命は進化しない。だから、ガラパゴス諸島のね、動植物は、海の中にあるので、あんまり環境の激変がないんですよね。だから、ガラパゴス諸島の動物たちは生きた化石と呼ばれてね、全然その太古の時代からあまり変化してない。進化してないんだ。成長しないんだ。だけども、この大陸に住んでおるね、そういうこの動植物は、環境の激変という、そういうものをですね、この与えられるから、だから、環境の激変というのは、うっかりしたら、全生物が絶滅するかもしらんというぐらいのですね、大きな問題なんだ。だけど、それがなかったら、生命は進化しない。であるが故に、環境の激変というこの問題は、母なる宇宙が自分の生んだ子どもたちを進化、成長させるために、母が与えた子どもの成長を願う愛の行為だというふうにね、言わなければならない。**

**環境の激変というのは、命を進化させるために、母なる宇宙が与える、そういうこの問題なんだ。だから、それは愛の行為なんだというふうに言わなければならない。一般的に言って、人間もやっぱり、問題、悩みがなかったら、成長はしないんだ。問題がない、悩みがない状態では、もうそれ以上の能力は必要じゃないですので、新しい能力も出てきません。新しい気付きも生まれてきません。そこでその人は終わりなんですよ。だから、ハッピーというのは、いかにもいいように見えますけどね、幸せっちゅうことは、もうそれ以上、成長せんっちゅうことですよ。だけど、人間の人生には、問題がなくなることはない。悩みがなくなることはない。自分は不完全だから、常に問題はある。その問題が自分を成長させてくれるというね、そういう働きをするわけです。**

**とにかく、今、自分が歩いておる道から出てくる問題というのは、こういう問題を乗り越えていく努力をしないと、君はこの道では成功できないよ。どういう能力をつくったら、この道で成功できるのか。それを教えてくれるために出てくるのが、今、自分が歩いてる道から出てくる問題、悩みの意味なんですよね。だから、この問題があったら、その問題のある方向性にその人が挑戦していく。その人がその問題の方向性に進んでいったら、その人は成功できる。その問題から逃げたら、君はこの道では成功できませんよ。それを教えてくれるために出てくるのがですね、今、自分が歩いてる道から出てくる問題、悩みの意味です。問題、悩みは、自分を成長させるために出てきてくれてるんだ。だから、その問題から逃げたらいかん。逃げてどうする。その問題に向かっていかにゃいかんという、そういうことになってくるわけですね。**

**で、問題解決能力をつくるためには、まずその理解が必要です。問題から逃げておったら、問題解決能力はできませんからね。問題解決能力をつくろうと思ったら、まずは問題は自分を成長させるために出てきてるんだ。だから、その問題をどうしたら乗り越えられるかっちゅうことを考えていくことによって、自分は成長できるんだというふうに、まず思わんといかんと。だけど、その問題から逃げたらいかんと言ってるだけでは、まだ問題を乗り越えられませんからね。成長できませんから。どうしたら具体的に、問題、悩みは乗り越えられるのかという方法論をちゃんと知らんないかん。問題、悩みを乗り越えようと思ったらどうするかといったらね、どんな問題、どんな悩みでもね、必ずね、どうするかといったら、この問題が、この悩みが、他人の悩みだったとしたら、他人の悩みだったとしたら、俺はその他人にどうアドバイスしてやるだろうかというふうに考えないと、正しい答えは出ないんですよ。問題を持ちながら、悩みを持ちながら、悩みのドツボにはまって考えておったら、答えは出ないんですよ。どんな問題でも、どんな悩みでも、夫婦の悩みでも、親子の悩みでも、組織の中の悩みでも、経営上の悩みでも、どんな仕事の悩み、どんな悩みでも、とにかくは、他人の悩みだったら、自分はその相手にどうアドバイスしてやるだろうかというふうに持っていったら、正しい答えが出るんですよ。**

**夫婦げんかは犬も食わんと。夫婦はちっちゃな問題で、その問題の核心がわからないで、がちがちになってけんかしてるんだけど、他人が見たら、またそんなことで何をやってんのと、こう言いたくなるんですよね。他人の目で見たらわかる。中に入ってしまったら、わからなくなるんですよ。悩みのドツボにはまるとね、悩みの本質が見えなくなる。これはどういうことなのかといったらね、深い森の中に迷い込んでしまったとする。深い森の中に迷い込んでしまったら、どうしたらいいのかっちゅうたらね、深い森の中に迷い込んだ状態で、どちらのほうに進んでいったら、その森から早く出られるかなと思っても、答えは出ませんよ。当てずっぽうにあっち行ってみようか、こっち行ってみようかと思ってる間に、もう疲れて、野垂れ死にしてしまうことになってしまうんだ。じゃあ、どうしたらええんだといったらですね、深い森の中に迷い込んでしまった場合には、その森の中に生えておる一番高い木のてっぺんに登って、一番高い木のてっぺんから森全体を外から眺めれば、そこにおるんやったら、こう行ったらすぐ出られると、一発で答えが出てるわけですよ。で、これが問題、悩みの答えを出す基本原理なんだ。すなわち、問題の中に入ってしまったら、答えは出ない。問題を外から眺める。そしたら、一発で答えが出てくる。これが問題解決能力をつくる方法なんですよ。**

**悩みのドツボにはまって考えるとね、悩みながら考えると、悲観的になってますからね、何をやっても自分がこれからしようとすることのマイナス面ばっかり見えてしまうんですよ。悩みながら考えるとね、こんなことをしたら、この子にかわいそうやしな。こんなことをしたら、隠しておきたいことがわかってしまうしな。こんなことをしたら、またこんな問題も出てくるしな。もうどうしようもないな。もう死ぬっきゃないかになってしまうんですよ。でも、死ぬっきゃないことになってしまって、もう俺は死ぬしかないんやっちゅって、友人に言うたら、友人はどう言うかというたら、だいたい友人というのは、待てよと言うんですよ。待てよと。死ぬ気になったら、なんでもできるやないか。それが他人ごとの世界なんですよ。自分ごとになったら、死ぬっきゃない。他人の気持ちになったら、待てよと言える。この距離感がね、問題を解決する距離感なんですよ。問題を外から見る。それが解決する原理なんですよ。中に入ってしまったら、答えは出ない、絶対に。出してもその答えは間違ってるんですよ。とにかく、どんな問題でもね、子どもの問題で悩んだ場合でも、夫婦の問題で悩んだ場合でもね、会社の問題で悩んでも、いろんな問題、とにかくは他人ごとにせんないかん。他人の悩みだったら、他人から相談されたら、自分はその人にどうアドバイスするだろうか。必ずいい答えが出るんですよ。だけど、悩みながら考えたら、みんな間違ってるんですよ、ほとんど。**

**だから、週刊誌に書いてあるような芸能人の悩みでもね、芸能人本人は、もうその悩みでもう身も細るほど苦しんでるんですけどね、その週刊誌を読む奥さま方はね、ちょっと読んだだけで、こんなことはこうすりゃいいのにねって言ってしまってるわけで、それが一番いい答えなんですよ。そうすりゃ助かるんですよ。だけど、それがね、悩んでる本人には見えない、わからないんですね。だけど、そう言ってる奥さま方もね、自分が家の問題で悩み始めたら、また八方ふさがりになってね、もう死ぬっきゃないになってしまうんですよ。とにかく外から、他人ごとにしてしまって、外から見たら答えが出る。これはなぜかといったらね、問題を感じるのは感性だ。答えを出すのは理性だ。理性の使い方を間違ったら、答えは間違ってしまうんですね。理性の正しい使い方を覚えんといかん。理性の正しい使い方とはなんなのか。理性というのは、客観性と普遍性の能力だ。理性というのは、物事を客観的に見る、外から見る。そして、普遍性、全体を見る。そのことによって、答えを出すのが理性能力なんだ。理性は客観性と普遍性の能力である。だから、物事を外から全体を見るという立場を理性に与えてあげないと、理性は正しい答えが出せないのね。だから、森の中に迷い込んだら、森の中の一番高い木のてっぺんに登って、森の中の一番高い木を探してるだけでも死んじゃうじゃないかと思うこともあるかもしれませんけどね。一応は、話としてね、話として、森の中に生えてる一番高い木のてっぺんに登って、てっぺんに登れるかっちゅう話もあるんですけどね、とにかく登っちゃったとしてね、で、登っちゃったとして、一番高い木のてっぺんから、森全体を外から眺めるならばね、そこにおるんやったら、こう行ったらすぐ出られる。一発でもう答えが出るわけですよ。これが問題解決能力をつくる基本原理なの。これさえ知っておったらね、どんな問題でも自分で解決できるんですよ。それぐらい大事な原理なの。**

**で、最後は真実の勇気ね。最後っちゅうことは、最後っちゅうことは、もう本当に最後でね、もういろいろやってみたけどね、もうどうしようもないと。もうこんがらがって、こんがらがって、こんがらがってほいってね、もうお手上げ状態になったと。お手上げになったらどうするかっちゅうことですね。お手上げになったら、真実の勇気しかないと。で、真実の勇気はなんなのかといったら、もう本音も建前も全部ぶっちゃけてしまう。もう隠しておるものは何もないというね、もうそういう裸一貫になってしまって、全部、投げ出すというね、そういう状態が、真実の勇気っちゅうんですけど、このどうしてか。人間が追い詰められるのはね、人間が追い詰められるのはね、これだけは守らないかん、これだけは隠しとかないかん、これだけは絶対手放せんというものがあると、追い詰められるんですよ。で、これだけはというものをぽんと放してしまったら、助かる道が出てくる。それが人生なんだ。人間、追い詰められるのは、守るものがあるからなんだ。隠しておきたいものがあるからなんだ。手放せないものがあるから、人間、追い詰められるんだ。**

**だから、仏教でもね、安心立命の人生を生きようと思ったら、執着を絶てというんですよ。自分の持ってるものに執着したらね、追い詰められてしまう。執着を絶てと。もう裸一貫になってしまう。生まれたときは裸なんだからね、だからもう追い詰められたら、もう全部、投げ出してしまったら、助かる道が開けてくるかもしらんというね、そういうことで、裸一貫になる。無一物になれというね、そういう悟りがあるわけですよね。で、実際問題、人間の人生というのは、追い詰められるのは守るものがあるからなんだ。執着するからだ。こういうことをね、歌にし**

**た、短歌にした言葉があってね、山川の、山川ですよね。「山川の末に流るるも身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」。「山川の末に流るるも身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」。ドングリの実がね、山の奥から、木からぽろっと落っこって、で、せせらぎに流れ込むんですよね。で、実が入ってるから、せせらぎに流れ込んだら、水の底をこう流れてくるもんですから、あっちこっちで岩にぶつかるわけですよ。で、どっかで急流になってですね、で、大きな岩にぼんとぶつかったときに、その殻がはじけて実が落ちる。「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」、実を捨てると、殻が浮いてくるわけですよね。で、「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」というのは、これ、捨て身になるというね、ことと掛けてるわけですよね。ドングリの殻の中に入っておる、実を捨てたときに殻が浮いてくる。助かるというね、そういうことを含んだ短歌なんですけども、「山川の末に流るるも身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」。これだけはとこう、自分が抱いてるものをぽんと出してしまったら、助かっちゃうというね、そういうことになってくる。**

**とにかく、よく考えとかないかんのは、人間、追い詰められるのは、守るものがあるからだと。これだけは絶対に隠しておかないかんというね、そういうふうなものがあると、どんどん、どんどん、追い詰められてしまう。そのときに、それすら手放してしまったら、助かる道が開けてくる。もうどうしようもなくなったらね、最後は無一物になる。もうあらゆるものを投げ捨ててしまって、ゼロからでも俺は出発できるんだというね、そういうこの覚悟というものを持ってるかどうかによって、人生最後の生き死にが決まるというね、そういうこの原理があります。真実の勇気というのは、もう裏も表も全部ぶっちゃけてしまう。なんも隠しとるものはないというね、そういう状態にしてしまう。その勇気を真実の勇気というんですよね。本当のことをぶっちゃけてしまう。**

**有名な『忠臣蔵』の話の中に、「大石東下り」という話があってね、大石内蔵助が、いざ討ち入りというときを迎えて、京都から江戸へ下るわけですよね。それを「大石東下り」といって、その東京まで行くときに、大石内蔵助という本名を使ったんじゃばれてしまうので、本名を使わないで、京都のお公家さんの名前を借りて道中を組むんですよね。橘右近という名前を使って。ところが、ある宿場に泊まってたときに、本物の橘右近が通り掛かっちゃったりなんかしてですね、俺が泊まっとることになっとるやないかっちゅうてですね、これは偽物やっちゅうんで、文句を言わないかんっちゅうんで、そのホテルじゃないわ、旅館に入ってきてですね、なんで俺の名前を語るんやっちゅうて、こう大石内蔵助に談判するんですよね。いろいろ言い合いになって、らちがあかんのでですね、証拠を見せろっちゅうんですよ。で、証拠を見せろって言われたときに、その大石がですね、もう最後の最後の窮地に追い込まれてですね、もう絶対に誰にも見せてはならないはずの連判状をね、ぱっと開いて見せるんですよ。で、その大石がなぜ橘右近という名前を借りたのかといったら、やっぱりそれなりに橘右近という、その貴族のお公家さんなんですけど、一応、尊敬しておった方なんですよね。**

**それで、その名前を借りて、道中組んだんですけど、その大石内蔵助が誰にも見せてはならない連判状を、これが証拠だってこう見せた。そのことによって、あ、これが大石かと。これから討ちに行くんだということがわかってですね、で、その事情を察して、その本物の橘右近が引いてくれてですね、で、その大石内蔵助に、あなたこそまさに本物の橘右近です。私が間違っておりましたっちゅうて、引いてくれて、で、自分が持っておる関所札をね、その大石内蔵助に渡して、どうぞご無事に江戸に着かれるように祈っておりますと。で、その本懐を果たされるように祈っておりますいうて、その大事な関所札を渡してくれるんですよ。私が言うたら、あんまり感動はないかもしれませんけど、それを浪花節か、この講談で聞いたら、もう涙なしには聞けないような、そういうね、非常に感動的な物語なんですけども。それがいわゆる、もう絶対、誰にも見せてはならない。隠しておかないかんものを見せたことによって、道が開けてきたというね、そういう理屈を超えた、真実をさらけ出したが故に助かったというね、そういうこの話なんですよね。**

**そういうこともありますのでね、そういう意味で、この窮地に追い込まれたときには、そういうこともできる。裸一貫になって、命もいらんというね、そういうこの状態に自分がなれるかどうかということは、最後の最後に窮地を脱する一策なんですよね。そんなこともちょっと考えてみてもらいたいと思います。今日は、悪化した人間関係を修復する、悪くなってしまった人間関係をどうしたら修復できるかっちゅうことを話させてもらいました。どうもありがとうございました。**